

■講師



小島麗逸 (Reitsu Kojima)

大東文化大学名誉教授、北京大学客員教授

一橋大学経済学部卒。アジア経済研究所主任研究員を経て、1987年から大東文化大学国際関係学部教授（2004年3月退職）。この間国際関係学部長、大学院アジア地域研究科委員長等を歴任。現在は大東文化大学名誉教授・北京大学客員教授。主な研究分野は中国経済論、アジア経済論、経済学（特に農業経済学・環境経済学・都市経済学）。主な著書に『中国の経済と技術』（頸草書房、1975）『世界の中のアジア』（大東文化大学現代アジア研究所、1996）『現代中国の経済』（岩波書店、1997）などがある。

●一司会者（山本一巳） みなさん、おはようございます。第2部、第2日目を開催いたします。それではさっそく、特別講演会を始めさせていただきます。本日の特別講演会講師はもともと中国国務院、西部大開発指導グループ弁公室の杜平先生を予定しておりましたけれども、国務院の重要会議のため、急遽来日していただくことができなくなりました。そこで本日は、日本の中国研究者の視点から、中国の西部大開発についてご講演いただくことといたしました。

本日、ご講演いただきます小島麗逸先生について、簡単にご紹介したいと思います。

先生は1934年のお生まれで、一橋大学経済学部を卒業後、アジア経済研究所にお勤めになりました。アジア経済研究所では27年間勤務されて、その後、大東文化大学に移られまして、17年間教鞭をとっておられまして、今年3月に退職されております。1950年代後半から実に44年間中国研究に携わってこられております。日本の中国研究の草分け的存在でありまして、中国の経済のみならず、歴史、文化、社会、政治、非常に該博な知識を持っておられまして、現代中国研究における、まさに第一人者であるといえると思います。現在は、大東文化大学の名誉教授、それから、北京の客員教授を務めていらっしゃいます。今年4月から5月にかけて、世界銀行の中国

の都市化に関する調査団の一員として、1カ月間中国に滞在しておられ、中国の都市調査をやっておられます。これは、先生が17、8年前くらいに出版されました、「中国の都市化」という書物が世界銀行の目に留まりまして、今回の調査団の一員に加わったものであります。私がうかがったところによりますと、先生は、これからは本当の意味での研究生生活を始めるとおっしゃっています。非常に頭の下がる思いがしております。それでは、小島先生にはだいたい1時間15分程度お話しいただきまして、その後、質疑応答の時間を取りたいと思います。

それでは、小島先生、よろしく願いいたします。

●一 小島麗逸 ご紹介に預かりました、小島でございます。実は、現在日本の文部科学省がCOE (center of excellence) に非常に大型のお金を出しています。私は審査の末席におりまして、アジア、中国関係では、日本ではただ二つだけがCOEに選ばれた。そのうちの一つがここの、加々美先生がおやりになっている愛知大学。もうひとつは、毛利さんがおやりになっている早稲田大学。あとはみんな落とされました。大東文化大学でもです。大東文化大学は中国の古い思想、文化に非常に造詣のある先生がおられるので、申請したのですが、それは落ちております。

COEをもらうかどうかというのは、文部科学省が大学の評価を決定していく大きなメルクマールになっておりまして、愛知大学のCOEがかなり進んでいるということは仄聞しておりましたが、昨日から参加させていただきまして、かなり頑張っておられるという印象を、私は持ちました。これは予算が非常に大きいため、実際の担当者、それから事務当局は大変働かなければならないと思います。一般に日本の私立大学は自分たちが自前で経営していかなければなりませんから、講義をあまり減らすことはできません。その上で、これだけ大きなプロジェクトを動かそうといたしますと、たぶん人の2倍は働かなければいけないのではなかろうかと考えております。大きな成果を取められんことを、まず最初に申し上げておきます。

今ご紹介にあずかりました小島でございしますが、私の名前をちょっと見ていただきたいのですが、麗逸^{レイップ}となっておりまして、私は北京大学の客員教授で、たまに行って大学院の学生を教えるということをやっております。ある人から「君は美人が逃げていく、という意味か？」と言われました。「麗」というのは美人です。「逸」というのは逸するわけですから。今日何人も美人がおられますから、どうもそういう意味ではないらしい。だから、私はこの名前はたぶんこういうことだろうと考えています。

昔の中国の人たちはすごい頭をもっておられる。今の人たちより頭がいいと思います。今の人たちは若干お金儲けばかりにいています。ここ「麗」と「逸」の間に「而」を入れますと、意味が違ってくるのです。「美人が逃げていく」という意味ではなくなります。「ハンサム・アンド・グレイト」という意味です。だから、私は人がどう思おうと、自分では「ハンサム・アンド・グレイト」というふうに信じきっております。

漢字というのは非常に面白くてですね。たとえば、「加々美」とは美しいのをもうちょっと加

えるという意味です。中国では「加一加」と言います。「一」を入れまして、「更に」という意味です。もともと美しい上に、まだ美しくなったら、これどうなるのでしょうか。

ところが、この「美」という字は、もともとは、例えば日本人では女性が「美人」と言われますと非常に喜びますね。ところがこの字を分解しますと、上が羊になります。下は大きい。だから、羊が夏の草を食べて、皮下脂肪がたまって、そこが一番おいしいのです。太った羊という意味ですね。お魚の刺身のとろも皮下脂肪があるところが一番おいしいでしょう。

しかし、今、日本の女性はダイエット、ダイエットでやせることばかり考えている。あれは間違っている。それで、そういう羊の肉を食べて、お腹いっぱい食べたらだめなのです。もうちょっとほしいというところでやめる。これがおいしいということです。こういう概念があるのです。中国の昔の人はすごい人がいるなあとというふうに、つくづく感じ取っている次第でございします。

こんな話をしていては1時間15分では足りなくなりますので、今日は西部大開発の話をする予定で、それをしなくてはなりません。それで、どういってお話をするかといいますと、今、山本先生のほうから西部大開発の担当者の、一番責任のある方がもともと来られるはずだったというご説明がありましたが、もちろんそういうお話は私ではできません。ただ、もうすこし違う側面から見た場合に、西部大開発というのはどういう意味を持つのだろうか、それで2000年の歴史を振り返ってみましょう、というわけです。その中で成功するかどうかですね。これを失敗したら大変なことになりますから。それで、成功には条件がございします。その点についてお話し申し上げたいというわけでございします。

最初にいろいろ文章が書いてありまして、どのような文章かと言いますと、本報告書91ページの最初のところに、人類史の古代プロジェクトと

ローマ帝国というのがございます。この400年の間に、ローマ帝国がどういう道路を作ったかというのが94ページ（図2）に出ております。地中海がございまして、実にローマ帝国が作った道路がこうなっております。現在のヨーロッパというのは、実は400年の間にローマ帝国が作った道路の上に出来上がっているわけです。今の言葉で言えば、道路建設のインフラストラクチャー、すなわち中国語では「基礎設施」(jichusheshi)と呼んでおりますが、その上で、地中海文明圏が出来上がって、ひとつの、今回のEUなどの基礎ができているわけです。これに400年かかっているのです。それでたぶん、占領地の兵士などを奴隷に使って作ったのではないかと思うのですが、壮大なものですね。

これに匹敵する二番目のものが中国なのです。こちらに出ておりますが。こちらが中国。こちらの中国をもうすこしこういうふうに曲げてみていただいて、これが秦の時代に Qin-dynasty から前漢、そして後漢、これは450年くらいございます。この間に作った道路網が、93ページ（図1）に出ております。これも壮大なものです。ほとんどが軍用道路です。それで後の唐代の統一が可能になっている。この中国の図はどなたが作ったのでしょうか。イギリスのケンブリッジ大学のジョセフ・ニーダム先生です。ジョセフ・ニーダム先生が20世紀に個人で書いた著作に、有名な「トゥインビーの世界の歴史」がございまして。ジョセフ・ニーダム先生がしばしば日本に来ておられまして、私も何回か日本でお会いしました。面白い先生で、この中国の科学と文明というのを書かれまして、その先生の考えかたは、こちら（横軸）に0年をとりますね。それで、こちら（縦軸）が、科学技術の文化の高さを何かではかる、水準、あるいは発明発見でもいいんですよ。そうしますと、古代からずっと長いこと世界の古代科学技術をリードしたのは中国であると。そして、どうしてそういう高い科学技術文明を作り上げたのか、と

いうのをまず研究したいと考えました。

ところが、17世紀くらいになりまして、中国は近代科学技術を創造することに失敗した。どうしてなのか、とこう言うのですね。中国の高い科学技術文明は横ばいとなっているわけです。ところが、アラブ、イスラム圏から出てきて、ギリシャと結びついた近代科学技術、ずっと水準が低かったのが17世紀の時点で急上昇します。これが、ヨーロッパ、西欧が作り上げた近代科学技術。どうしてこれが近代科学技術を作ることに成功しなかったか、とこれが第二の彼の問題なのです。書いているうちに下から積み上げるとこんな本になっているわけです。もうお亡くなりになって10年くらいたちます。96歳か97歳でお亡くなりになりましたが。私はイギリスには一回しか生涯行っておりませんが、一度だけケンブリッジ大学に行き、先生と少しお話しする機会がございました。それから日本に来た時も何度かお会いした。それで、もし生きていれば、中国が1950年以後、中華人民共和国ができて、今盛んに西欧のあるいは日本の技術、科学技術を吸収しておりますが、こういうふうには上昇している。その後、西洋文明に追いつくか、追いつかないか、21世紀にたぶん決まるだろうと。それまで私は生きておきたいということをおっしゃっていただきました。だから、彼の研究のモチーフは、何故、古代からこれほど高い文明を作り上げたかというのが第一点。第二点は、どうして中国は近代科学技術を作ることに失敗したのか。そして、ヨーロッパに追い越されたのかというのが第二点で、生涯それで研究、こんなにたくさん本を書いた。全部ではありませんが、一部は日本語に翻訳されております。この大学にはたぶん入っております。これがなかなか面白い先生で、こういうことを言うのです。

私は「先生は大変貧乏で、ハムが食べられないほどだったのですか？」と聞いたんです。先生の名前 (needham) の中にあるのはニード (need) ですから必要って意味でしょう。後方はハム

(ham) だから、これは、そのくらい貧乏だったということですか、ということです。というのは、イギリス人は80%以上がファミリーネームを持っていなかったのです。日本もそうです。江戸時代まで、日本でファミリーネームを持っているのは、15%しかいなかったのです。私の家についてはありませんでした。くまつあん、はつつあん。落語に出てくる、そういう家系なのですが、そうしたら、先生は「ミスターコジマ、君はいいことを言う、その通りだ」と。実はそうではなかったのです。中国研究者にこういう人もおまして、みんなハムがくっついているのです。サセックス大学の中国研究者にオールドハム (Oldham) という方がいるのですが、“Oldham” だから古いハムばかり拾ってきて食べていたのかと冗談を言って笑ったことがございます。実はこれは私に合わせてです。これは食べるハムじゃなく、ハムレット (hamlet) なんですね。ハムレットというのは、自然村という意味です。自然村ですから中国語でいうと“zirancun”ですね。日本でいうと集落という意味。ニードというファミリーネームのあるこの部落とか村、そこの出身で、名前にくっついただけなのですが、私の話に合わせて、我が家は先祖様が非常に貧しかったんだ、ハムが食えなかったんだと、まじめな顔して笑いもせずに言っていた先生です。

この先生が作ったのが、世界の巨大文明、三つ、いや四つあります。ローマ帝国が作った文明と、中国の古代文明が作った文明、あとインド文明、アラビアの文明がございませぬ。その中で、要するにインフラストラクチャーが後の基礎を築いているという、これをまず頭に入れておいていただきたい。これが今日のお話の、最初の導入部分でございます。

西部大開発というのは、ニード先生が描いたこちらの図 (93ページ、図1) をもう少し、近代、現代的に再編成するように動かすとかそういう感じがいたします。それで、これが成功するか失敗す

るか、実際に西部大開発を開始したのは2000年からですから、計画はずっと前からございます。しかし現在、計画の全容はまだ出来上がっておりません。各部門別に、2010年とか、2030年とかいう計画はできつつございますが、何十年続くかはわかりません。これは、たった今、われわれが現在よみうるのは、2003年までの実際の手がけた西部大開発の計画と実施状況しかわかりません。だから、ほんの当初で、これを反転することは難しいのです。ほかのいろいろなことを考えますと、ある程度、こういうのはたぶん失敗するだろう、これは成功するだろうということがわかりますので、今日はそのお話を、とこういうわけでございます。

そこで、個別的に通信網とかインフラストラクチャーのお話をちょっといたしますと、そのあとにいくつか図がございませぬ、たとえば、これが光ファイバー (96ページ、図5) です。そして、これがガスと石油のパイプライン (95ページ、①) です。これが計画図 (95ページ、②) です。1990年代の初めから作り上げてきた。すごいものでしょう。この中の大部分はもう完成しております。光ファイバーになりますと、ここに書いてありますが (96ページ、③)、ほぼ50万キロメートル。もうすでに設置したものがラサマまであります。私は、今日のお話は西部大開発ですることとなっておりますが、本当はお話を資格が無いのです。なぜならば、西部地区というところへは、ほとんど行ったことがないのです。行ったのは陝西省だけ。陝西省というのは、あれは西部に入れるか入れないかの境目のところ。いいところ。それから、青海省に一度だけ、2泊3日しただけで、実際に見ていないのです。内蒙古はぜんぜん行っておりませぬ、新疆はもちろん行っておりませぬ。だから、百聞は一見に如かずで、そういうところへ行ってないのにこのお話を、文献上だけでお話を、というのはよくないと思ひますが……。

ここに高速道路網の主幹線があります(97ページ、図4-1)。高速道路網は縦に5本ですね、これ主幹だけですよ、メインの高速道路、ここから枝が分かれておりますね。横は七本こちら(97ページ、図4-2)。これは今大部分が建設されております。建設されておまして、統計はここに書いております。2002年、2003年が2万5200キロ。日本は6500キロございます。1963年から建設をはじめまして、これを日本の政府が決定している1万2000キロに、国家の予算で建設するかどうかで、小泉内閣は、この間、もうこれ以上は建設できない、ということをおさえようとしかかっているわけです。というのは50兆円という膨大な借金を抱えているからです。日本の国鉄は、中曽根さんが民営化したときには28兆円という膨大なお金を投入しました。28兆円というのは、1万円積み重ねると富士山の七合目までいきます。そんな借金を後代に残していいのか、という話になりますが、その倍近い借金を日本の高速道路の建設で、現在抱えているわけです。こんなことをしたら、国が減びるのではないかというのが小泉さんのお考えです。日本の6500キロ、だいたい7000キロと考え、頭に入れていただいて、中国の2万5200キロ。これを、去年の統計をやりますと、ほぼ3万キロになります。この3万キロというのは、現在アメリカが高速道路は世界の最長で、9万キロありますが、その3分の1をわずか13年で作っているわけです。これはものすごいスピードです。

これにはいろいろな理由がございます。どうしてこんなに早く作れるかということ、中国の土地はみんな国有であるから引き渡しなさい、ということが可能なのです。日本は私有ですから、そういうわけにはいきません。私有財産の真正というのは憲法で定められておりますから、買収するだけで大変時間がかかります。成田の空港で考えてみてください。30年もの間、たった3軒の農民のためだけに、第二の滑走路が作れないのです。こ

れは私有権の問題です。こういったさまざまな問題が関わっているのですが、どのくらいまでいくことになるのか。どうも私は、中国はアメリカをあつと10年たったら追い越すだろうと考えています。実は、西部大開発の中では道路網建設というのはものすごいのです。この、距離の感覚が非常に重要なので、それをみなさんに頭の中に入れていただいておいて、この6万キロといっても理解しにくいと思います。一番わかりやすいのは日本の在来線です。新幹線ではなく、在来線です。距離がどれだけあるかということ、東京からずうつと北の方まで行って、北海道の稚内まで行きます。そこまで1500キロです。それから東京からずうつと東海道線、九州までいきます、西鹿児島という九州の一番南の端まで行きます。これが1500キロ。だから日本の鉄道の一番北から南までは、3000キロメートルあるということがいえます。これを頭に入れていただいて、中国の高速道路が3万キロというのは、日本の10倍の距離のものを15年間で作った、こういうことになります。

では、建設するためのお金をどこから持ってくるのか、これで採算は合うのか、とこうなります。採算はほとんど合っていないはずですが、私の計算では。うそか本当かわかりませんが。

日本の現在の自動車の保有台数が、7300万台ございます。中国は公表されているのは2400万台です。ただし、これには解放軍の保有台数が入っておりません。解放軍の自動車を含めるとおおよそ3000万台になります。つまり、中国の自動車保有台数は日本の2分の1以下ということになります。では、これは1台に対して何メートルの高速道路があるのかということ計算してみますと、驚くことに日本は1台当たり10メートルなのです。中国は1台当たり実は100メートル。いかに自動車が高速道路に比べて少ないかということがわかります。今3000万台あるとすれば、3億台の自動車の保有量になってやつと、日本の自動車の保有量と高速道路の距離の比率が同じにな

る。その日本で、高速道路は50兆円の赤字。日本の場合は山の中を通っていくので高いのですが、中国は平らな土地が多いですから、日本の建設会社の人の話によりますと、4分の1くらいの費用で作れるのではないかということです。それにしても、走っている自動車は少なすぎると感じます。

先ほど、司会者のご紹介にあずかりました世界銀行のプロジェクトにおいて、我々の国際調査団にはフランス人の学者がおられるのですが、フランス人の学者は朝から晩まで、こんな無駄な高速道路を作ってなんの役に立つんだ、と我々が移動するバスの中で言って歩いておりました。だから中国から来ているローカルスタッフは頭にきて、あんたの言うことは間違っている、将来のためにやっているのだ、と。将来のためにやるのに、だれがどうやって負担しているのか。要するに経済的な感覚で言いますと、現在かなり無駄な高速道路を作っているのです。西部大開発の中の計画では、これは高速道路だけではございません。一般道も、です。中国では四つに分かれております。1級、2級、3級、4級、それから等外と分かれておりますが、それを全部含めまして30万キロを建設することになっております。30万キロです。現在日本の舗装道路の長さは、80万キロくらいあります。つまり、西部の地域だけで日本の舗装道路の3分の1を、おそらく、10年から15年の間に作るという計画なのです。では、その費用をどうするのでしょうか。これは採算が合うのでしょうか。と、こういうことになります。

インフラストラクチャーの建設が西部大開発の中で一番の大きなプロジェクトですが、これ以外に四本の大きな鉄道建設を予定しておまして、これは、中国の公表された西部大開発で、延長距離が実に4200キロくらいあります。4200キロというのは先ほど話をした日本の在来線の3000キロを頭に置いて考えてみてください。2万キロあるのですが、この5分の1くらいが現在西部で着

工している鉄道です。これは採算合うのだろうか。それほど運ぶものがあるのだろうか。人間がそれだけ乗るのだろうか。と、こういうことになるのです。私は経済学をやっておりますから、すぐ最初にそういう発想がくるわけです。それ以外に、先ほど言っていた通信網がございます。それから、さらに飛行場。西部の非常に広大なところ……表しますと、日本と中国の国土面積は1：26ですね。日本は37万平方キロ。中国は960万平方キロですから26倍なのですが、西部開発の対象の地域は1：18なのです。日本の18倍の広さです。だから、鉄道であれば、4000キロや6000キロあるいは1万キロは必要でしょう。しかしながら、そのときに必要なことは、経済計算をすることです。つまり、作るだけではいけないのです。これをどうやってメンテナンスするか、メンテナンスということは、経営が出来るかどうか、という問題なのです。作ってお客がほとんどいないとなると、誰かがこれを何十年も負担しなければなりません。では、実際こういう計算が成り立っているのか。膨大な西部大開発に対する文献がでております。ところが、きわめて少ないのは、中国の場合、その経済計算なのです。

そこで、過去の大きな人類の道路網建設について、ローマ帝国の話のひとつしました。それ以外にも非常に大きなのがございます。中国の秦の始皇帝以後に行われたものをそのひとつといたします。

再び91ページ(1-3)の上の方に、19世紀の後半に行われたアメリカの西部大開発がございませぬ。これは、三本の横断鉄道を作って、それで可能になったわけですが、このときの牽引力は、すなわち、金(キン)です。金が豊富でして、それを取得するために西のほうへ行ったわけです。そしてカリフォルニアへ出て、これは大成功を収めました。大成功という意味は、すなわち、アメリカという広大な領土の中に統一的な市場を作り上げることに成功した、というこ

とです。

さらに大きなものに、帝政ロシアが19世紀に行った鉄道建設がございませう。ヨーロッパ、ロシアからウラル山脈を経て、現在の中国の東北地方に入る鉄道を作りました。それから、中国の東北地方からちょっと北のウラジオストクに出る。この鉄道をわずか25年で建設いたします。あの当時の技術では大変スピードが速いものです。これも金が関係しております。金を求めるのと、木材を求めてくるのと。それから、トラなどの獣皮です。これが高く売れたのです。こういったものにひきつけられ、鉄道が建設される。それが後のスターリン時代のソ連統一に、非常に大きく寄与するわけです。

それから、さらにこの5番目(91ページ、1-(5))ですが、1930年代から70年代の旧ソ連時代に行ったウラル山脈以東の都市づくりがございませう。実はこの都市づくりが今日、ロシアの大変な財政の重荷になって、あの当時で作った都市が崩壊し始めているのです。そのすぐ下に(91ページ中盤)、英語で書いてある文献がございませう。こちらに、関心がある方はお読みになったらいいのですが、Fina Hill and Chiford G. Gaddy という方々の共著で、“The Siberian Curze”。これは、「シベリアの憂鬱」と訳していいと思うのですが、How Communist Planners Left Russia Out in the Cold は、寒冷地あるいは極寒の地にロシアを放置してしまった、と。おそらくこういう意味なのだと思います。それは、ほとんどは軍事都市なのです。軍事都市は、政府のお金を使ってこのように拠点を作っていくわけです。拠点を作っていくことによって、当時アメリカとの対抗が非常に激しかったわけですから、ミサイルや駐屯地を作り、そして、この拠点都市が、もともと人間の住むに適切な地域ではなかったため、周辺に広がらなかったのです。こういうのを、日本語では飛び地と呼んでいます。飛び地。中国でも最近こういう言葉が使われ始めましたけれども、周辺の経済と関係な

く、そこだけにあるところから金を持ってきて都市を作っているということです。このような都市は発展が少ないのです。英語ではエンクレーブ(enclave)と呼んでいます。こういう飛び地だけ作っていきますと、その地域はいつまでも、どこから輸血、すなわちお金をもってきておかないと、息ができなくなります。実はこれが、五番(91ページ)に書きました1930年代から70年代にいたる旧ソ連のウラル山脈以東の軍事都市建設というやつです。

それ以外に、古代に行われた中国の大きなものとして、春秋戦国から明代まで建設がおこなわれた万里の長城がございませう。万里の長城。これはどのくらい作られたのか。これも私、関心がございませう。万里の長城へは、3回くらい行ったのですが、長城のレンガの厚さを一生懸命測ったりして、現在の日本の建設費用で万里の長城を築いたら、何兆円いるのかを計算したことがございませう。1980年価格でね。ばかばかしい話ですけれども。ただ、仮説、仮定が多く、発表はしていません。万里の長城は、現存しているのですが、消滅したものがたくさんございませう。実際に建設したのは、中国の学者の本によりますと5万キロあるといわれております。これはほとんど消滅して、たとえば、われわれがよく行く北京市の中の八達嶺(Badaling)。そこで、万里の長城に入る少し手前のところに崩れたのが見えます。それを内城(neicheng)と呼んでおりますけれども、これはinner wallではないかと思ひます。英語で訳せばおそらくそうなりますが、これは崩れたのがございませう。これは時間的には2000年ですが、実際に建設したのは奴隷労働によって数百年で作られたのだらうと思ひます。現在残っているのは明代に建設した万里の長城で、それでもずいぶん崩れておるようですが、で、これはもともと北からの民族の侵入を防ぐために作ったものです。これを作るためにどれくらいの金を使ったのか。これを中国の経済史ではだれも計算していないのです。

しかし、西部大開発の計算にはこれが必要じゃないか。中国の学者の方が多くですから、経済史をされている方は帰ったら言うておいてください。無駄になった……あれだけやったって中国王朝は何回も滅びているわけですから。滅びるといのは内から滅びますから。外から来て滅びる帝国はめったにありません。家庭もそうですが、内部から崩壊していきますから。個人もそうです。有名になっていい気になっていると、そのときにはやっぱり自分がおかしくなっている。ひとつの社会も文明もそうなのです。外壁を一生懸命作っても、何回も中国王朝は内部から崩壊しています。それによって中国文明が維持されたのではないのです。これは無駄遣いです。

ただし、今は違います。これがなかったらどのくらい観光収入が減っているか。今度は観光収入を計算しなければなりません。これは今の人たちの成果ではないのです。先祖様であって、外国からお客を呼んでそれで儲けているのです。それはそう考えなきゃいけないと思います。前の先祖様が努力した上で、これが成り立っているわけです。

1000年とか2000年は、経済学では対象にいたしませんでした。経済学というのは、四半期ごととか1年とか3年くらいしか計算できないのです。これは寂しい学問ですね。この学問で西部大開発を考えてはいけません。それは最後に申します。にもかかわらず、やっぱり儲かるか儲からないかを計算しなければなりません。

それで、こういういろいろ巨大な構築物をやっているのですが、そういうものに匹敵するのが、私は西部大開発じゃないだろうかと考えるわけです。成功したら、それこそ16回中国共産党大会で、中華民族の復興ということを江沢民 (Jiang Zemin) が言いました。中華民族の復興というのがスローガンになりましたが、2020年以降あるいは2050年くらいまでに、そういう中華文明を復興したいというのが、第16回大会の中国共産党の総体的な意志でございまして。成功すれば、確

かにそうなると思います。しかし、危ない側面が非常にあるということをごこれから申し上げます。

この先ほどあげた六つか七つの中で、成功したのはアメリカの西部大開発だと、こう申し上げましたね。これによって、国内の統一市場を形成するのに成功した。一番失敗したのが、スターリンからやり始めた旧ソ連のシベリアの軍事都市建設です。これは今、ロシアの重荷になって維持するのが大変です。もう維持できなくなって、人々がヨーロッパ・ロシアのほうへ移動しているという、こういう状況になっているわけです。だから、アメリカの西部大開発的な成功の可能性があるのか、あるいはソビエトがやったシベリアの軍事都市、点としての軍事都市、こちらの可能性はあるのか。これをやっぱり比較する必要があります。

西部大開発の一番大きな目的のひとつは、資源開発でございまして。これは、この資料 (95ページ、No. 2①) に出ている通りです。こうした、電気や石炭。石炭を海、沿岸からこちらへ持ってきて、こういう図ですね。それから、これが4200キロあります。新疆のあそこから上海のここまで完成いたしました。4200キロですよ、完成したのですが。これは天然ガス。それから、もちろんパイプ……これは天然ガス、これガスと書いてありますが、それから電気も書いてあります。要するにエネルギー資源を主体として、西部にあるものをこちらへ持ってくる。これが現実的には一番大きな理由です。なぜならば、もう中国は大変な原料輸入国になっており、木材であろうが、銅であろうが、パルプであろうが、それから鉄鋼石であろうが、日本に匹敵する、あるいはそれ以上の原料暴食国となっています。日本の古紙、新聞紙の古いものの争奪戦も、古紙のだいたい7割くらいは日本から中国に行っております。東京では、古紙を密かに出しておくと、これは誰のものかと所有権論争がございまして……。どうも最近、日本では古紙を出しておきますよね。そうするとそれは各市町村の管理下にあるもので、やっぱり

窃盗、盗みのひとつだというふうになっているようですが……。高く売れるので、ずいぶんそうやって持ってくるのです。このように、鉄屑、古紙まで含めて大変な資源不足国、エネルギー不足国に転化しております。この解決のために……。これはある意味では理解できます。これが一番重要なのです。このためのインフラストラクチャーの建設ですね。

第二の目的はですね、貧困の解消というのがございます。ここの地域は非常に貧困地域が多い、特に農村地域で貧困が多いですね。それもスローガンとなって出ております。

それから、第三は生態系の回復がございます。この生態系の回復をご説明いたしますと、砂漠化だとか、それからエロージョン (erosion) ですね、日本語で言えば表土流出と言うのですが、中国語では「水土流出」と言っております。この図 (100ページ、No. 7①) を見てください。こちらの地域の開墾は、漢民族の開墾がずっと昔から行われております。牧草地域をみな畑にすることによって、さまざまなことが発生しているのですが、中華人民共和国になって以後、まずこちらの図 (100ページ、No. 7②) を見ていただきたい。縦軸が人口の流入率です。例えば内蒙古を見ますと、内蒙古の前年の人口に対して何%の人間がここのときに入ったか、という図です。100人いると10人入ってきています。これはものすごい数です。続いて黒龍江省、新疆、青海省の順となっております。1950年代から、最初の山はここにありました。本当は毎年書かなければならないのですが、この当時作ったときにそういう資料はなかったものから。5年ごとの資料しかなかったのこちらでやっています。中華人民共和国ができた直後に、都市では貧民層がございましたが、その貧困層を追い払ったのですね。当時の方針が、国民党の退散兵、負けた兵隊や都市にいる人たちを故郷へ返すことを第一優先にしたものでした。そこを、行くところがない人を追い払ったのです。その次が

ここののですが、だいたい1958年から60年というのは、約1500万人が餓死いたしました。例の人民公社を作ったときです。その際も、大躍進政策を実施したときに、都市に流入した人たちをもう一回帰れ、と。要するに維持できなかったわけです。都市の人たちはあの当時、配給制を取ってございましたから、都市へ入った人たちに与える食料がなかった。それで、帰れと。おおよそ2700万人くらいです。それでも食えない人たち、これが入って開墾しているのです。そのためにこういう図 (100ページ、No. 7③) ができるわけですが、これも。こちらは、新疆だけです。新疆は、国防上の問題があつて違う様相がございます。こちらが新疆です。1950年前後ですね、これが全体の人口ですが、31万前後です。その数パーセントが漢民族です。

こちらは、人民解放軍から分離した建設兵団とっておりますが、日本でいうと、明治時代の初めの屯田兵です。開墾しながら、武器を持ちながら、という。こういう建設兵団が新疆開墾の中心部隊になるわけです。中の人口構成を見てみますと、95%は漢民族です。今日これを見ますと、40数%は漢民族……。この大部分が、あの当時はまだ資源開発ではないのです。要するに農業開発ですが、したがって農業が中心だと。そこで、乾燥地域ですね。新疆はいろいろな箇所がございますが、なにしろ砂漠を含めまして日本の3倍くらい広さがあるのです。そういう地域で、農業を中心にやっている……。ここはがくと減っておりますが、これは中国とソ連が大変対立しているとき、ソ連が侵攻するのではないかという噂が広がって、入植したかなり人間が逃げていくのです。これは後にわかったことで、あの当時はわかっておりません。それで、いったんがくと落ちます。これは『新疆統計年鑑』からみんな取っています。そこで、要するにこの時代で中国は飢えている。現在中国は食料が有り余って困っておりまして、現在の中国の農業問題というのは、農産物の過剰

生産です。これは1955、1956年から発生いたしますが、この当時は飯を食いたくても食えないという時代で、結局こういうことになったわけです。これが後に大きな矛盾をもたらすわけです。

その大きな矛盾のひとつを、こちら（101ページ、No. 8①）で見ていきたいと思えます。これが1992年に公表された、砂漠化の問題です。いろいろな印がついておりますが、これはどういう意味かと言いますと、現在砂漠化が進行しているということです。この網掛けの部分（101ページ、No. 8①）のこれですね。これが13（察哈尔草原）です。ここ、内蒙古中部が一番広いですね。それから青海省へ行きますと、ここに青海という塩の辛い、広い湖がございます。毛沢東が、ここで潜水艦を造り、潜水の訓練をしろと言ったところで、実際にまだ台が残っています。そういった場所なのですが、この周辺、こういう湖の周辺、それからタリム盆地を含めて……これは内蒙古中部というふうになっておりませんけれども、ここ（陝西、山西の北部、内蒙古の西部）もあるのです。こういうところは、特にここが一番ひどいのですが、だいたい農業と牧畜が混合の地域です。おそらくこの中にも御専門の中国の学者がおられると思えます。牧畜だけならいいのですが、農業を始めますと、この辺りの降水量というのは、300ミリとか400ミリですから極めて難しくなります。だいたい、農業生産においては500ミリを切りますと、毎年の安定的な収穫が得られません。500ミリ以上の降水量があれば何とかできる。そこのところを農業と牧畜を混合でおこなったために、ここ10年くらい大変な黄砂がでていいる。ここばかりではございませんが……。こちら（101ページ、No. 8①）の縦（陝西、山西北部）は、回復しているところです。これは私に言わせれば1950年代から60年にかけてですね、こちらの、本土の方の矛盾を、飯が食えないということの矛盾をここで解決させるということが新しい矛盾を作り始めた。だから、開発というのは必ずいいこともあ

りますが、まずいいこともあるのです。中国語で「有利就有弊」という言葉がございますが、いいことというのは100%ないのです。人間だってそうでしょう。あの人は美人だけれど鼻が高いとか、あの人は豪胆磊落だけれど横柄だとか。開発もそうなのです。その点が非常に私は、重要じゃないかと思ひまして。そういう過去の、本土の人口密集地の食料を解決するというのが、今の世代に大変な矛盾をもたらしてきているという問題です。そういうことが西部大開発で発生したらやっぱりよくないわけです。その点について、これは砂漠ではなく塩害化です。塩害化は乾燥地域ならどこでも発生いたします。塩害地に灌漑すれば必ず発生いたします。先ほど、青海省の近くの砂漠化が非常にひどいということを申しましたが、それも塩害化と一緒にしております。私は一度驚いたのですが、アメリカに行った際、まず日本からアラスカへ行って、それからカナダの間をずっと直行して、晴れた日で1万メートル上から見ておりましたらね、湖の周辺が白くなっている、塩が吹いているのです。これが肉眼でも見ることができました。蒸発が激しければ当然あるわけですが、こういう乾燥地はだいたい降雨量に対して蒸発量が10倍以上ですから。ひどいところは100倍になっておりますね。そうすると、当然塩害化がずいぶん発生します。ここ（内蒙古東部）は今申しましたように大変ひどいですね。ここ（山東省周辺）はもう昔からある。これはもう伝統的にあることですが。これは、乾燥地において灌漑をおこなったりするために生じる、二次塩害化です。よって、砂漠化とか塩害化というのは一体化している。

それからもうひとつは、表土流出です。表土流出というのは、エロージョン（erosion）ですが、これであれしておきまして、それで、西部大開発を行う、どのくらいのお金で行うかということは、まだ全貌はわかっておりません。全貌はわかっておりませんが、若干の資料は出ております。例えば、重点プロジェクトだけに関しましては、2000

年に1000億元、1000億元とといいますと1兆5000億円くらいになります。1兆5000億円くらいのお金というのは大変なお金で、非常に覚えがよいのですが、2000年から投資を始めていますから、2001年には2000億元になりますね。そうしますと、2000億元がちょうど倍の日本円で3兆円、中国で2000億元。2002年が3000億元、これが4兆5000億円という計算になります。4兆5000億円となりますと、かなりの金額です。失敗は許されません。重点プロジェクトのみで、です。それで、重点プロジェクトの全体を含めて今までにどのくらい投資したかと言いますと、1兆元というふうに公表されておりますから、これは中国の長期国債を朱鎔基（Zhu Rongji）首相のときに発行いたしまして、そのうちのほぼ45%が西部大開発に使われる。この公債の利子がそれほど低くはないのです。4%から5%。今の中国も、です。この前、利子を少し上げましたけれども、過去に比べれば低くなっております。これは、10年、20年先に償還していかなければならないのです。この償還するお金について、それだけ投資して建設したから利益が上がるのか、こういう問題がでてくるわけです。だから、1兆元ということはですね、今まで政府が投資したのが、全部で日本円にして15兆円になります。日本の一般会計の国家予算が今85兆円ですから、15兆円というのがどのくらいになるのかというと、たぶん20%くらいになります。そういうお金をこれからどんどん投入していく。投入し始めると、すぐにやめるわけにはいきません。持続的に投入していかなければならないのです。それで、その図が、財政の統計をとってここ（98ページ、No.3）に記してあります。地方財政の自立度というものをここに書きました。これは、二つ……例えば、内蒙古ですが、ここに二本ずつグラフが確認できると思います。左側が1995年です。右の方が一番新しく2003年ですが、このように矢印が下を指しております。これは自立度が低下したことを示してい

ます。そして、これが西部大開発の全国平均で、左側が西部大開発の対象地域ですが、右側を見ていただきますと、こちらの相違はですね、右側に比べますと、1995年もそうですが2003年のいずれも西部大開発地域の対象地域は相対的に地方財政の自立度が非常に低い。要するに、税金を取るための主な産業がないということです。農業が主体、それからもうひとつ、鉱産物が主体なのです。それで、農業が主体のところ、これは県の財政もそうですが、県は英語ではcountyですね。財政もそうですが、農業省とか農業県というのはいずれも財政が悪化しているのです。特に7、8年はそうです。税金があまり取れません。これは惨憺たるもので、中国のそういう地方財政を見ていきますとね。だから、この自立度が非常に低い。例えば青海省などは2003年で自分のところから全体の支出の20%のみ、あと80%は中央からもらっているということになります。

それで、もう一つのグラフ（98ページ、No.4）を出しておきますと、これがどういうものかと言いますと投資額です。1人当たりの投資額というのをずっと計算したものです。ここに全国平均がございましてね。それで、沿岸が大変発展している。沿岸地域……これが北京、上海です。それから天津ですね。それから浙江省、江蘇省、広東省。これらは1人当たり大変高いですね。これだけたくさん投資、要するに経済の発展において、投資というのは自動車でいうとアクセルになりますから、アクセルをどのくらい強く踏めるか、少ないところはどんなに望んだってできませんよね。こちらが1995年なのですが、こんなに低い。こんなに差があったのです。こちらも低いですが、圧倒的にこちらが高いですね。ところが、2003年を見ますと、西部地域の数値が非常に高くなります。すなわち、寧夏、新疆、それからチベットですね。それから内蒙古、これは非常に高くなるのは2003年、という西部大開発の始まる年ですね。資本が投入されていくわけですね。

すなわち、国家予算を中心に投入していくというふうになるのです。これで、例えば10年の国債で10年後から返済が始まるということになったときに、10年前からずっと投資してきたものが返せるだけの利潤を上げられるのか。ここが一番、鍵なのです。私の申し上げたいのは。上げられない場合には日本の、今の国家財政のようになります。日本の国家財政というのは、地方財政を含めて大変な赤字で、日本政府の国債、これは1年間のGDPの、1.3倍くらいの借金を抱えて、中央政府が動いているわけですね。これは1万円札を積み上げますと、富士山の300倍くらいになるのです。それで、みんな日本は豊かだ、不況だとかいって、喜ぶか悲しむかしているわけですが、私が大蔵大臣だったら一睡も出来ませんよ。借金の上に積み重なっているのですからね。非常に多くの、いろんな理由がございませうけれども、ケインズ経済学の悪しき適用なんです。要するに、総需要が少ない。経済は供給と需要ですから、それでは少ないから、需要を政府がばら撒いて作れば経済は発展するのだ。これはまあ、日本における第二次世界大戦以後の政府のやり方で、ばら撒けばばら撒くほどいいというように考えるわけです。それも、単なるばら撒きではいけないから、子孫のために残すといって道を作ったり、橋を作ったり、いろいろしているわけですね。挙句の果てに、採算の合わないところまで作り始めた。その典型例が先ほど言った、四国と本州に三本の橋を作っている。これは永久に償還できないですよ。ということは、われわれの代が子孫に借金を残していくのです。日本には、「美田を子孫に残すな」、という言葉がございませう。これは昔の話です。美田というのは非常に生産性の高いものを言いますが、明治以前は生産性の高い農田を子孫に残すと、親から財産が来たから息子や娘があまり働かなくなるから、これを子供に残しちゃいけない、とこういうふうにいるわけですね。親はみんな金使って死んでいけと、こういう言い伝えが

あったのです。今は違うんです。借金をたくさん残しているのです。しかも、支払えない借金を残して、われわれは平然と政府に文句を言っているのです。「もうちょっと金よこせ」と。こんなことやって日本はもちますか!? これを西部大開発でやったら、私は、これは成功しないだろうと。いいですね?

そして、退耕還林、すなわち今まで飯が食えなかったために、先ほど砂漠化を作り上げたようなところを開墾して、今まで切り抜けました。ここを林に戻そうと、林に戻そうとやっております。しかし、これは、解消されるのは何年先ですか。日本は杉の木、これはだいたい40年、それから、もうひとつは檜。これは、日本の国土なら50年くらいで売れるんです。ただ、今は国際価格が非常に低いものですから、もうあまり切っておりませうけど。要するに、使えるようになるわけですね。中国の北方のほうはこれではいけません。第一に、植えた木が付かないのですから、活着しないのです。一本一本、丁寧に植えなければだめなのです。飛行機で種を撒いておりますが、あれで芽がはえてくるのは、北方ではほんのわずかです。したがって、草をはやす、草をはやすというのも、これも中国の先祖様は偉い人が多いですね。私はこの漢字を見てびっくりしました。中国の昔の人は頭がいいと思って。この「草」という字は、草冠ですね? この草冠から見て、草というのは作物より早く伸びて、作物を荒らしてしまうというのが草という意味なのです。だから、早いがついているのです。だから、中国語ではcaohuang(草荒)という言葉があります。これは、作物より早く伸びて作物を覆ってしまうから作物はとれない、という意味を中国語ではこう発音します。「caohuang」と。ところが、日本のように気温からいうと三回草をとらないと作物はありません。中国へ行って見て、それを感じたのは西安ですけれども、おお、草というのはこれだけしか育たないのか。これは尊いなあ、と。そして、

青海省へ行ったのです。もう少し短いですが。ああ、これで草原とっているんだなあ。中国の草原というのはこんなものなんだなあと思って。要するに、成長が違うんですね。本当に違うんです。だから、放牧とか、その草を利用したもの、それをえさにした畜産というのは、日本に比べまして非常に苦しいのですね。日本はもう、生えてしょうがないのですから。だから、この漢字を作った人は、たぶん西安よりもっと雨の降るところの人が作ったのじゃないかなと思って、ちょっと漢字の歴史も調べてみたいかなと思っておりますけれどもね。それで、これに金を費やす。私が一番びっくりしたのは蘭州です。これは、一度一泊二日だけでしたが、飛行場に行く間に、一生懸命、退耕還林、すなわち畑を林に戻すといって一本一本植えて、そこにスプリンクラーがあった。あのようなスプリンクラーをやって水をやらないと活着しない、このコストは高いですね。コストは高いです。それが70年くらいたないと木が切れない。すなわち、退耕還林の経済計算は60年から80年で収益があるかどうかという、会計、経済学を作らなければならないのです。資源開発はまだいいですよ。これは簡単に計算できます、資源開発は。そういう論文が、西部大開発の中で出てこないのです！ これはどうしてですか？ だから、ここに大勢中国の学者がおられますから、帰ったらそう言うておいてください。このまま金をだぶだぶ使えば、西部大開発は、今はうまくいくと思っても、これは間違いなんです。開発は必ず破壊を発生させるわけです。いま、説明したとおりですね。そのことを頭に入れた形で、中共中央の誰さんが言ったからといって、中国の学者はそんなものばかり引用する必要はないのです。もっと科学的に、これは採算に合わないけれども二代後の世代のために、今からお金を使いますと。そうして国民に説明して、これは我慢してくれ、これは30年間で回収できるプロジェクトだ、これは10年で回収できるプロジェクトだ。こういう計

算をやらないと、とんでもないことになるのではないかな。なぜなら、アメリカの西部大開発とは違うのです。金があったのです。牧場が簡単に拓けたのです。太平洋側に出られたのです。太平洋側に出られるということは交易ができますから、交易上の収益がでてくるのですね。それは西部ではできないのです。

そこで、結論のほうに参りますと、最後のほうのですね、文章のほうへいっていただきたいのですが、92ページを見てください。92ページの資金面、成否判定の基準と書いてあるところですね。財政資金問題、国債利子、構築物の減価償却費問題と書いてありますが、これはいま再三申し上げたように、財政資金、国債の利子が払えるかどうか、財政資金というのはそのままもらってしまい、中央の負担になっておりますから、プロジェクト自体の問題で中国の負担になります。しかし、だから、これはやはり財政上の負担がどこまで続くか。それから、中国の一般のこうした建設プロジェクトの中には、減価償却の概念が極めて薄いのです。これには驚いたのですが、実は先ほど山本さんが紹介された、昨年の10月から11月にかけて1カ月の世界銀行のプロジェクトで、これは中国の国务院の体制改革委員会が世界銀行に委託して、中国の都市化において、小都市が発展するかどうかというのを見極めてほしいと。それで、国際調査団が編成されて、私が日本から参加しているわけですが、そのとき、行くべきところへ行って、この道路の耐用期間と維持費はどのくらいで計算しているのですかと言ったら、ほとんど答えられないのです。では、あなた方に減価償却費という概念はあるのですか、と。日本は高速道路を維持するために、30年かけて見ると建設費以上に維持費が要るのですよ、と。これは、中国と日本の高速道路では違いますから。平地と高いところで。今度の地震などを見ていると、ああいう日本のように条件の悪いところは維持費が高くなります。中国はたぶんそうではないと思うので

す。しかしながら、無機物の価値は建設したときには最高なのです。あとは年々減っていくわけですね。それをどういうふうに計算しているのですかと言ったら、ほとんど答えられない。計画委員会の方が北京から一緒にわれわれに同行しておりますね、計画委員会はそれを指示しないのですかと言ったら、計画委員会の中では、われわれはそういうことを議論しておりますが、まだ体系的にはない。それが本当の答えかどうかはわかりません。建物はあるんですね、ビルにつきましてはね。それで、建物、構築物を更新するときに大きな問題というのをこの例で考えてみたい。はい。上海には20階以上のビルが実に2000本あるんです。いいですか？ 上海の一番発展している浦東の開発区というのは、あれは、私はニューヨークには一泊二日しか行っておりませんからマンハッタンなんて見たことはありません。写真でしか見ていないです。あそこよりもたぶん発展しているでしょうね。日本の、新宿の高層ビルの何倍かはあります。あれが、取り崩さなくてはならなくなったときにどのくらいお金がいるのですか。あの廃棄物をどこへ捨てるのですか。上海はいいですよ、まあ埋め立てれば。ところが中国の都市はね、みんな内陸にあるんです。四川省に成都という250万の都市があります。これに20階以上のビルが120本あるんです。これは『成都統計年鑑』にしっかりと書いてあります。あそこで、20階以上のビルがだめになったらどうするのか。中国のビルは寿命が日本より少ないのです。なぜなら、特に1980年代に建設した中国のビルは、コーティング、要するに防水コーティングが技術的に非常に悪いんですね。だから雨が降るとこういきまして、鉄とセメントの間に浸透してきますね。だから、日本の専門家に言わせると、日本が60年もつのに中国では30年から40年じゃないか。1980年代から90年にかけて大変なビルをつくりました。先ほど蘭州の話をしました。蘭州も……これは統計がないから、仕方がないので私が高い山に

登って目で計算したのです。60本くらいあるのですね。土地がもったいないから高くなっているのです。しかし中国は日本のように地震があるんですよ。地震の歴史をずっとやりますと、震度7以上のはだいたい中国は世界一が多いのです。いいほうも世界一、悪いほうも世界一。地震の大きなものはほとんど、歴史的に記録されているのは中国ですね。ただ、雲南省とか新疆省とか、あるいは青海省で発生したときには人間が少ないので人的損害が少ない。ただし1976年の唐山地震のときは24万人死にましたから。24万人ですよ。2400人じゃないですよ。神戸、淡路は6000人なのです。だから、すべて中国を考えると時には、マルを一つか二つつけて考えないと、いいほうも悪いほうもでてこないのです。いいですね。それで北京は海岸から150キロあります。だから北京でビルを潰して海岸まで持ってくる。この廃棄物の運賃だけでものすごいんですね。しかし、いま日本のビルというのは、壊すことを考えて建てているわけですね。こうやって離しておくらしいのです。それで、うまく倒れるらしいのです。そういう設計ができておりませんから、1980年代から90年代にかけてたてられたものは2020年、30年ごろ、解体し処理する費用はどのくらいかかるのか。だから、こういうことを西部大開発の各プロジェクトに入れて計算してやらないと、子孫にいいものを残そうと思っても、そうはならなくて負担になりますよというのがここでいいことです。

もう一点。結論の二番目です。労働力、これはですね、孔雀は東に、雀は西部に残るという言葉があるんです。孔雀というのはいい人材らしいです。これはみんな東に来てしまうのです。人間は、貧しいところにはいられませんね。当たり前のことです。いいものが全部出て、西部は発展しますか、とこういう問題なのです。要するに、労働移動において出稼ぎ以外で定着する人間を、あの貧しい、砂漠に近いところで定着させうるかどうか。

これはかなり難しい。かなり難しいです。それからもうひとつ。これは、私が北京大学で大学院の学生を教えている、このようにいったのです。「我不太喜歡新西蘭」。私はニュージーランドがいやだ。ニュージーランドというのは、ここに書いてあるようにこう書きます。新疆の新、それから西です、それから蘭州の蘭です。これはニュージーランドという国名なんです。これは、私は新疆へ行くことはいやだ、チベットへ行くことがいやだ。甘肅省(省都：蘭州)へ行くのはいやだ。こういうところへ赴任するのはいやだと大学院の学生が言ったのです。君、これはニュージーランドの人たちが聞いたら、私はニュージーランドが嫌いだという意味になるから、口にするのはよしたほうがいいよ。俺に言うのはいいけど、ニュージーランドの人に言ったらいけないよ、と学生に言ったことがありますけど。これは1989年、天安門事件のちょっと前です。私は講義に行っていて。これが一般の雰囲気、要するに西部へは行きたくない。それで、西部大開発の計画によると、チベット赴任の幹部は2.5倍、賃金を上げました。2.5倍ですよ。これは正式の文書によってです。それでもたぶん定着しないだろうと思います。そこで、どういうことが発生するかというと、中国語でいきますとこうやって書いてあります。これは都市の建設のやり方ですが、「以線串点，以点带面」、これはどういう意味かといいますと、鉄道の線でも道路でも、そういうところに日本語で言うとお団子の串刺しのように都市をつくっていく。これは、だからこういうところの都市のことを指すのです。この都市が中心になって、ここにこういうふうに都市を作っていくのです。これは小さな都市です。こうやって面に広げていくという考えです。このアイデアはすばらしい。しかし、これは不可能です。砂漠、半砂漠地帯は不可能です。いいですか。どうしても、これは飛び地になります。これは、今度の世界銀行のプロジェクトでは中国の都市化で小都市が発展するか

どうかを見極めてほしい。そして、私の答えはNOなのです。10万人以下の都市は発展しないのです。日本、韓国、台湾、ほかの国を全部調べても、10万人都市というのは縮小してまいります。いいですか。どうしても人間というのは大都市に集まってきます。しかも、これが乾燥半乾燥地域です。実は先ほどの“The Siberian Curze”、軍事都市をシベリアに作って失敗したというのはこれなんです。こういうところに軍事都市を仮にぼんぼんと作っていくと、この周辺に広がらないのです。そして、これの後に重荷になってくる。だからこのアイデアはよしたほうがいい。これは、朱鎔基の中に出てきますけど、西部の小都市を発展させるという。これは雲南省や貴州とは違います。これはまた別のものです。西北地域はこのアイデアはよしたほうがいいです。これをつくり、無理して発展させようとする、大変維持するのに金がいります。やっても、人間が出てきてしまう。出てきたときには、これが一番うまくいっているのは浙江省ですね。浙江省は中国の中の小都市建設ではもっとも典型的にうまくいっている。これは、なぜならば郷鎮企業がたくさんあるために、小都市が非常に出来る可能性がございます。乾燥地半乾燥地はそれがまず不可能だろうと。もし、これを無理して作れば、財政コストがものすごくかかるとそういうふうになる。それからその次に、これは都市形成だから……そのことはここに書いてありますね。日本語で言うと連結性という翻訳にしているのではないかと思いますけれども。英語でいきますと *connectedness* と、こう呼んでおりますが、連結性ですね。ここ、中心都市とこういうところの連結性を、都市建設でひとつの市場圏が出来上がるという意味で *connectedness* というのをを使うのです。そのため、日本語では連結性とか何とか呼ぶのですが、結局、大中都市の空間編成において、空間を作り上げていく、都市の空間を作り上げていく場合は、そういう中心都市と周辺の都市との間に、そうした市

場的な、あるいは生産上の *connectedness* がないと維持できないという考えですね。それで、実は先ほどの “The Siberian Curze” という本の中には、それが結局失敗したから、後の、今のロシアの子孫に大きな重荷を課しているのだと、こういう分析なんですね。だから、乾燥地帯、半乾燥地帯につきましては、これはその問題がやはり頭の中にある。

もう一点だけあります。これは、よく言われているのでたくさん説明はしませんが、水の問題ですね。1990年代前半で黄河流域はもう、供給力以上に需要量が増しました。これは改善されるかということ……お天道様、神様相手ですから、改善はたぶんされない。だから、水で、しかも黄河のちょっとあれがございませぬけれども、西部大開発の計画を見ておきますと、黄河に1950年代に作ったダムが二つございます。ここの間に実に11のダムを作ることにしております。そうしたら、下のほうの水はどうなるのか？ 90年代に入りまして、黄河断流、一番ひどかったのは1997年ですけれども、水が流れなくなりましたね。そのかわり、黄河は昔から16億トンくらいの土砂が流れ出るといわれておりますが、最近の調査ではこれが7億トンまで減少した。それはダムを作ったからですね。だから防砂ダムなら意味がありますけれども、では中下流域の水をどうするのですか？ 下流域のところは、現在開発し始めた大運河を作ろうとしているからいいのですが、中流域はどうするのですか？ こういう問題がありますね。これはだから、西部大開発の一番の制限要素ですね。たぶんこれは、解決できるのか、長江の上流の水をここへ流せば、話は別になるんですがね。そうすると下流の問題が当然出てくるでしょう。そういう水の問題は御専門が多いでしょうから、もうあんまりしません。

それからもう一つは、最終的には民族問題があるのです。そして、この民族問題の一番大きな問

題は、少数民族の大部分がまだ、農民であり牧民であるということです。これは非常に生活水準が低いですね。それプラス文化面において、たぶん彼らが一番耐えられないとするのは、自分の文化的アイデンティティ、中国語でなんと言うのかな、アイデンティティってわかりませんが、帰属意識でしょうかね、文化の問題です。それが、やっぱり漢民族……歴史的にいいますと、漢字文化圏というのはみんな周辺の民族を溶かしていきましたから。その力が非常に強いわけです。そういう民族的な独自性というのを維持しながら協調できるかどうかというところと、一番貧しい……大部分がやはり貧しい、少数民族はやはり農民たちですから、いや、牧民ですね、これをどうやって上げて行くのか。それから、指導者はだいたい漢民族ですよ。ほとんど漢民族です。だから、その問題はやはり依然として残る。これはたぶん社会的な、政治的な問題だと思っております。

それで、もう一回繰り返しますと、経済の側面からいきますと、人類が行った大変なプロジェクトの中で、アメリカの西部大開発ほど成功したものはたぶんないだろう。しかし、これとは比較できない。あれは海のほうへ向かっていったわけですね、太平洋側へ。中国の西部は西部へ行っても海はないんですよ。しかも砂漠半砂漠地域に手を加える。そして、大きなパイプラインにしても何にしても、建設は必ず破壊を生む。だから、その破壊した後、修復する費用をプロジェクトの中にどのくらい組み込んで、それぞれのプロジェクトを計算しているか。だから林に戻す、草原に戻すというのは、たぶん100年で儲かるか儲からないかを計算したほうがいいだろうと。ところが資源開発になりますと、たぶんこれは10年から20年のタームで、利益を生むかどうか計算したらいいだろう。そして、そうしたプロジェクトごとによって、われわれが習った、あるいは使っている経済学では違う *time horizon* と言っておりますけれども、時間の限界を決めまして、そういう経済学的

な分析というものが西部大開発にはきわめて重要だと。そして、それが非常に欠けているということ、私はほとんどまだ読んでおりません。読んでいないけれども、痛感いたします。過去の人類が行った大きなプロジェクトを反省してみますとね。ということで、私のお話を一応終了いたしたいと思います。

●一司会者 どうもありがとうございました。大変有益で興味あるお話をいただきまして、本当にありがとうございました。また、該博な知識に改めて感服いたしました。

30分間くらい質疑応答を行いたいと思います。せっかくの機会ですから、中国の方はどしどし質問していただければありがたいと思います。それではどなたかご質問のある方は挙手をお願いします。

●一質問者 小島先生のご報告に、非常に感謝致します。先生は小島という御名字ですが、しかし語られた問題は大きな問題であり、まったく小さくはないと私は思います。西部大開発問題について、私はいくらかの仕事をしたことがあります。主要なものとしては、中国工程院による「水資源の配置および生態環境建設の持続的発展」と題したプロジェクトに参加したことです。中国工程院は温家宝総理、つまり当時の副総理に対して直接総括報告を行いました。私自身三度の総括報告に加わり、温家宝にも会いました。私達にはいくらかの観点があります。当然のことながら、西部地区の比較的乾燥した、水不足という状況において問題を解決する場合、重要なことは水資源の問題ということになります。しかし、西部地区の1人当たり水資源は東部よりも高いのです。例えば、新疆は河北や華北といった東部地区に比べて数倍高く、10倍とも言い得るでしょう。新疆は人口が少なく、水の問題といったものは必ず解決できるでしょう。それにはしっかりした計画が必要ですが、これはひとつの見方、つまり西部開発の水資源問題なのです。水は不足していますが、しか

し現在において、水の問題には細心の注意を払っています。生態環境にはおおよそ50%の水が必要ですが、総水量において生態環境が50%必要であれば、残りの50%は経済および社会のために使うことができます。

続いては二つ目の問題です。私は、かつてソ連に留学したことがあり、アメリカにも留学したことがあります。私は、いわゆるふたつの超大国のいずれにも行ったことがあります。だから、アメリカの西部開発、およびシベリア開発については理解しています。しかし、少し考えて比較してみると、中国の西部大開発とはまったく異なっています。私はアメリカのルイジアナに行ったことがあります。そこには西部開発の時代を象徴するアーチ型のとても大きな建物があって、私達はそれに登って見たことがあります。私はシベリアにも行ったことがあります。それはロシアのモスクワへ留学する際、シベリアを通してモスクワに到るとき見たものです。私は、中国の西部開発とこのふたつの巨大なプロジェクトは違うものだと考えています。もちろん、アメリカの場合は成功しており、さきほど小島先生がおっしゃったことに同意します。ロシアの場合、私はそれが軍事上のものであったと考えており、ロシアの東部地区もまた海に続き、シベリア開発もやはり沿海部へと到ります。アメリカの場合も沿海ですが、しかし同じではありません。そして、アメリカの現在、とりわけカリフォルニアの経済はアメリカ全体の60%を占めています。そのため、ロスアンゼルス一帯の経済は非常に発達しており、世界における比率もまた非常に高く、世界で最も発達した地域となっています。それでは、中国の西部大開発とはどこが異なるのでしょうか。私は小島先生に、中国の西部が中央アジア、また同時にヨーロッパと繋がっているということを考慮するよう提案します。私達はそのことを「ユーラシア大陸橋(Eurasia Continent Bridge)」と呼んでおり、このことはとても特色あるものだと考えています。か

つて、私達はそれをシルクロードと呼んでいました。それは中東に通じており、文化・経済交流の道でした。現在の西部大開発では、小島先生がとくに道路建設および鉄道建設を話されましたが、これは国際的にとても意義のあることです。私は、もし西部開発がさらに延長され、中央アジアの多くの国家、さらにはヨーロッパまで到れば、これはとても良い経済上の軸線となると考えています。中国国内においては、かつての一時期、ユーラシアという大きな地域から論じることが多くなされ、東は江蘇省の連雲港から始まり、そこからは現在の隴海鉄道と呼ばれる鉄道があり、それと関連して、蘭州から新疆に到る蘭新鉄道があり、そこから中央アジア、さらにはロシア、ヨーロッパへと繋がる。それについては、その戦略的な意義、経済上の作用や社会上の影響について、より一歩進んだ分析が必要となると考えています。これが、私が強調したい第一点です。第二点は、その特色を考慮しなければならないということであり、西部大開発は乾燥地帯を通っているけれども、しかし湿潤な地域まで継続し、さらにヨーロッパまで進み続けることができるということです。こうした要素を、私は西部大開発のとても重要な側面だと考えています。もちろん、西部大開発にはその他の特色もあります。例えば、私達は西部の天然ガスを必要としています。これはすでに着手されています。「西気東輸（西のガスを東へ運ぶ）」、あるいは「西電東送（西の電気を東へ送る）」と呼ばれていますが、電気というエネルギーは、水力発電についてはすべて西部に集中しており、西南地区には、金沙江、怒江、諫淪江などがあり、これらの河は大量の水利資源を有していますが、しかしながら中国の現在の水力発電量は10%ちょっとで、90%近くは石炭を用いて発電しています。この場合、大気汚染は非常に深刻で、環境という視点から見れば、「西電東送」という水力発電による電力の大量輸送は、中部地区のエネルギー構造に組み込まれれば利点は多いです。資

源という角度から見れば、西部大開発とはこのような関係があり、小島先生のお考えに同意します。同時に、私は貧困問題解決に資するとする小島先生の意見にも同意します。なぜなら、西部地区はかなり貧困だからです。しかし、西部地区の現在は、例えばその条件から言えば、様々な側面から見て国家の資金投入以降、やはり明確な改善が見られると考えています。ウルムチのような都市は、将来必ず中央アジア最大の経済、社会、文化の中心となると推測しています。このことは非常に重要です。西部大開発は、新疆について言えば、中央アジア全体とヨーロッパに対し、一貫して大きな影響を持ち続けるでしょう。この一点により、私は西部開発が成功するだろうと信じているのです。そして、ロシアのシベリアのようにはならないでしょう。シベリアは海に繋がっていても、非常に多くの弊害があったと思われるからです。当然、私達は経済問題、すなわち採算が取れるか否か、どのように考慮すればよいかを注意しなければならない。しかし、基本的には現在の中国政府は人間を本位とするということを強調しており、胡錦濤は西部地区にはとても多くの少数民族があり、かつかなり貧困だと言っています。西部を開発する意義について言えば、政治的意義については考慮する必要があるのか、社会的な意義を考慮する必要があるか、それらはまったく経済だけの問題ではありません。以上が私の評価です。

●一 小島 西部の、新疆などの1人当たりGDPは非常に高い。所得も高い。それはその通りなんです。その通りなんですけど、それは中央政府からの輸血によって高くなっているのです。自分たちのところの経済が発展して、それで高くなっているのではない。これを頭に入れていただきたい。それから、中部よりも西部のほうが1人当たりの所得が高いということをおっしゃっておられましたが、中部のほうは農業省が中心なのです。湖南、湖北、農業が非常に多いところです。江西省のところですが、湖北省もそうですよね。そういうと

ころは先ほど言ったように農業が全体的に衰退しておりますから、これはなかなか所得が上がらない。それに対して、西部のほうは中央から大開発でお金が行っているから所得が高くなる。しかし、これは永続的なものではないというのが私の答えです。二番目、西のほうへ行ったら砂漠や乾燥地帯へ行くだけじゃないかというが、そうではなくて、これはヨーロッパと結びつくのだ。その通りです。しかし、一本だけです。アメリカの西海岸は発展して行って、太平洋側がアメリカ経済と一体化していくというところで、やはり違うのです。したがって、それにお金をたくさん使うということは、それだけ将来収益性が少ない。それは頭に入れた上で建設をしないと大事になりますよ。これが私の意見です。必要性は大変私は認めます。われわれだって旅行できますから。上海から上陸して汽車でずっと……。シベリア鉄道でなくとも使えます。しかしながら、経済のほうから見ますと、それはほんの一部分に過ぎず、問題は利益が生まれるかどうか。西部のほうの経済が発展して、ですね。ということに視点を置いて考えたほうがいいのではないですか。そういうのは必要ですから。これはもうかりません。しかしながら、国として必要ですと。その部分があっていいという、それを私は否定していません。しかし、全体として大きな投資をする場合には、それぞれのプロジェクトが何年で回収されるか、されないかという計算を、かなり厳密にすべきだということが私の主張なのです。

●—**司会者** どうもありがとうございました。次の質問に移りますが、後部座席でどなたかいらっしゃいますか？

●—**質問者** さきほど小島教授は経済計算の問題を話されました。私は数年前、西部開発会議において一度、西部への投資という問題、つまり西部への投資で誰が得をして、誰が被害を受けるかということについて発言したことがあります。このことは、まったく純粋な計算上の問題ではありま

せん。経済学を研究するということは、すなわち金についてであり、金を投資して、他の事には目もくれず、どのように金を稼ぐかというもののなのです。もし、金を稼げれば、次回は今回よりも多く投資し、金をより稼ぐことができる。西部開発においてひとつ重要なことは、西部それ自身の金融問題にあります。それは、金を作り出す金融構造を創設できるか否かということなのです。アメリカの西部開発とは砂金採集であり、当時銀行業はちょうど確立される過程にありましたが、黄金があれば銀行業の確立に非常に好都合であり、そのため成功の機会は比較的大きかったのです。銀行業が発展していなかったとしても、黄金があれば直接銀行や都市を建設できますから。中国における現在の全体的な発展は主として金融の発展であり、それゆえ広東および浙江の発展がかなり速いのです。広東では政府の金を、日本で発行されている債券のようにし、すべて民間へ投入しています。すべて民間に任せることによってこれらの金を回収しており、もちろん政府関係の会社はすべて損をしています。江浙一帯は実際に私的な金融が発展しており、現実において四大商業銀行でさえ、地下金融のようなものと連携しており、その関係は非常に強いのです。金を動かしたければ、そこで投資することで金を稼ぐことができます。西部における投資は、毎年100億、200億が投じられており、十数の省に投資されていますが、それらは根本的に注目されていません。収益はどうかと言えば、実際に収益はあり得ません。しかし、技術という観点から言えば、つまり金を稼ぐという観点から論じないのであれば、当然投資する必要はありません。しかし、西部をどのように開発するかというとき、資源については考慮されないものであり、市場経済においてそれらの資源を、もし個人を呼んで投資させられるとすれば、資源を東部まで運ぶことができます。現実において中国の独占の程度は、個人資金という点でまだ問題があります。ただ、もしローンが許されれば、すべ

ての石油および天然ガスの開発は完全に民間企業が行うことができます。私営企業を発展させることは、政府に投資させるのに比べてより便利ですが、しかし、すべての都市化を進展させ、全体の経済を発展させ得るという可能性は大きくはありません。私はずっとこのように考えてきました。しかし、この話はすでに4年前にしたものです。現在のすべての投資は、4年来日々西部大開発を呼びかけて得たものですが、しかし西部の省の投資成長率、およびGDPの成長率は一貫して全国の下位にあります。かつ、政府が投資を増加させていながら、格差はより大きくなっています。現在の問題はつまり、目下発展していく趨勢についてのみです。政府が西部の資源開発を個人に開放するということが、私はこの一点だと思います。もうひとつは、政府は投資、つまり財政投資を拡大させる場合、金を出すだけで効果や収益を考えてはいけないということであり、これらはすべて重要なことです。しかし西部開発の過程は、思うに東部がさらなる発展を遂げた10年後を待たなければならず、もしもある人が西部へ行って地主になろうと思ったとき、そこでは西部の人を搾取することになるでしょう。そのときに至り、西部の発展はまた加速するでしょう。これが私の見方です。

●—小島 あの投資全体の利益率計算というのは、非常に計算することは難しい、これは、私はその通りだと思いますね。だから、そういうことを私は申しているのではないのです。計算できるプロジェクトに関しては、やはり減価償却と将来の収益率を、これはどうしても中へ入れ込んだ上で計画をたてないと、10年後とか、例えば20年後ですね、これは負担が非常に多くなる。例えば、1960年代、三線建設というのを中国はやりました。三線建設というのは、第一線は沿岸地方ですね。それから第二線というのは、中部の地域、それから第三線というのは、貴州だとか雲南だとか四川だとか、あそこへ軍事工場を持っていったわ

けですね。これはソ連との対立があり、アメリカとの対立がありましたから、爆撃、ロケットで打たれるというのを心配して持っていったわけです。もともと工業の力のないところです。そこで、そういうところへ軍事、兵器産業を持って行って工場を建設しようとする、工業用水、運搬用道路、運搬用鉄道、こういうものにもものすごくお金が取られていって、1980年代以後、その三線建設にきわめて否定的な見解が中国の中で支配的になりました。これは結局、当時はまだ政治がだいたいそういうことを決めておりましたから、採算ベースのことは考えていなかったわけです。国の危急、存亡にあるときに、という形でとられた政策なわけです。そして、今日は三線建設がマイナスだったという見解もございません。というのは、さらに向こうの西部まで大開発するということになっておりますからですね。だから、時代によって変わっていくのですが、1960年代から70年代にかけて行った三線建設に対して、1980年代から批判ばかりする人が出てきているわけですが、それはやはり間違いなんです。それは長期の、15年とか20年の、あるいは30年の時間の単位で考えれば、初期的投資と考えられるわけです。そうした、なんというのでしょうか、プロジェクトごとに区分けをやる必要がある。プロジェクトごとに利子率と減価償却率と利益を、計算できるものは計算した上で国民に説明する必要があるのではないか。それが私の主張なのです。だから、全部の資金で計算しろと、こう言っているのではないのです。わかっていただけますか。

●—司会者 それでは次の質問をどうぞ。

●—質問者 さきほど拝聴した小島教授のお話は、なんと申しますか、大変興味深い講演でした。とても啓発されました。私はいくつかの具体的な問題について、あなたと意見を交換したいと思えます。あなたがおっしゃった道路改修問題に関して、この道路改修というのは、ひとつの基本的な概念かもしれませんが、確かに私も大規模な幹線

道路の改修というのは採算が合わないと考えています。午後の私の報告でも、このことを話すかもしれません。しかし、私は西部における道路改修というものは、主として幅の広い幹線道路の改修ではなく、距離の長い道路の改修であると考えております。つまり、幹線道路の最も基本的な役割というのは、ひとつの場所に到達するという事です。あなたは、現在交通量は多くないとおっしゃいましたが、しかしある場所に到達する必要があるのです。上下二車線の道路を改修すれば良いのであり、上下三車線を改修する必要はなく、そうすればコストは大きく低下します。これは道路改修についてのことなので、当然土地の問題にも関係しますが。

そして、二つ目に私が言いたいのは、西部大開発についてです。あなたは経済計算という問題を提起されました。これは、さきほど劉さんにも触れましたが。実際、この分野において彼が分析した枠組は、すでに効果と利益の分析ではなく、ある種の効果分析であり、それゆえ効果と利益の評価については、全体的な戦略から論じなければならず、利益と効果というものを経済的なものに限らず、政治、さらには国防など、総合的に考慮しなければならないのです。しかし、たとえ経済上のものに限って言っても、多くの効果と利益は計算しにくいものです。あなたが提起した問題を私なりに考えますと、それは中国における多くの大型プロジェクトに共通する問題であり、啓発を受けました。私は、例として淮河を挙げたいと思います。最近、中国では淮河の治水問題について論争が繰り広げられていますが、結局どのぐらい投資して、投資の効果はどうか、といったことなのです。私の知るところでは、多くのそうした問題においては、念入りの計算は、たとえ効果と利益がはっきりと計算できないとしても、コストを計算することはできます。こうした方法はリースト・コスト (least cost)、つまり最小単位のコストと呼ばれるものです。あなたの発言からは確か

に啓発を受け、かつ共感しました。だから、私はそういった視角からあなたの指摘を理解したいのです。しかし、計算というものをもし西部全体として論じれば、事情はとても複雑となります。そのうえ、技術選択の問題となると、それは総合的な問題となります。例えば、西部へと向かう道路を改修すべきか？ また、鉄道を改修すべきか？ 航空路の幹線あるいは支線を発展させるべきか？ というように異なる技術選択があるのです。例えば、私個人としてはチベットに繋がる鉄道の建設を主張してはいません。チベットには多くの飛行場があり、その路線を発展させることがより良い選択かもしれません。もちろん、これは技術的な論争になりますが。しかし、いずれにせよ費用対効果の分析は可能であり、それはひとつの新たな観点です。実証的な開発の過程において、それはひとつの新たな前例、あるいは新たな見積もりなのです。私の知る限り、例えばアメリカの大きな開発計画、あるいは大きな国家的公共政策といったものはいずれもそう解釈しなければなりません。それらは明確に計算できるかには構わず、ある程度までしか計算しません。私は、そうした方面での計算を強化しなければならないと主張しています。さらにもうひとつは、あなたがさきほどおっしゃった一言が私の関心を喚起したということです。それは、あなたは経済学について話されましたが、それによって計算すべきは予見し得る回収率であり、1000年に及ぶ事柄というものを計算するのは非常に難しいということです。あなたが提起された命題を論じてみると、実際に経済学というものは、とくに私達が工程経済学といっているものでは、そうした項目を評価するとき、どのぐらいの回収率があるのか、内的な割引率はあるか、またその周期を計算するなど様々なものがあります。しかし現在、私は新たなひとつの動向を発見しました。持続的発展という問題、あるいは時代を跨ぐ問題を研究する場合、その周期はすでに人類の生命、あるいは個体としての生命の

周期を超えています。200年に及ぶ事象、例えば現在のグローバルな気候変動という問題を考えるとき、その周期は数百年、200年あるいは300年の事象であり、これは一世代の人間では明らかに見ることでできない事象です。ケンブリッジ大学やスタンフォード大学の教授らが最近多くの本を出していますが、いずれもこうした時代を跨ぐもの、すなわち長期的な割引率の問題です。これは間違いなく経済の最前線の問題です。あなたの提起した問題は、私達、とりわけ若い学者たちを、そうした問題に取り組みさせるに足るものかもしれません。10年、20年の回答率といったミクロ的なものを計算するのではなく、時代を跨ぐ問題、すなわちいわゆる継続可能な発展 (sustainable development) というある種の割引率の問題を理論的に考えさせるのです。

そしてもうひとつ、あなたが西部大開発と長城を比較したことは、とくに面白かったです。しかし、私の基本的な判断では、この二つの大工事の機能は本質的に区別されるものだと思います。なぜなら、私は現在の西部大開発とは、経済開発の視点から行われているものだと理解しているからです。しかし、長城は明らかにそうしたものと直接関係はなく、少なくとも秦の始皇帝当時や、明代における長城修理のとき、経済開発を考えると、国防の意味がより強かったでしょう。私はアメリカのスターウォーズ計画あるいはミサイル防衛システムなどを想起するのですが、それらの投資は非常に膨大です。こうしたものの場合、問題はそれをやる必要があるのかということではなく、できるのか、やる金はあるのか、その能力があるのかということに帰されます。そして、その能力があるならやれ、ということになります。相対的に切り離された経済システムにおいては、ある種の需要を創出するでしょう。しかし、自らの能力を超えれば、それこそがソ連失敗のひとつの原因ですが、自らを支えられなくなり、軍備競争を生み出して最後には経済の足を引っ張りまし

た。では、アメリカはなぜ勝ったのか？ アメリカにはその力があったからです。アメリカには全体的な経済の基礎があり、経済発展の潜在能力が依然としてあり、それゆえ多くの金を投入して防衛システムのようなものをやることのできるのです。しかし、西部大開発においては、やるべきことはまったく別のことなのです。

では、最後の問題ですが、私はあなたが提示した統一市場という問題に触れたいと思います。私はこれこそが西部大開発の重要なキーポイントだと考えています。もしも、西部大開発がひとつの統一された市場とならなければ、あたかもシベリアの軍事工場、あるいは三線建設当時の状況と同様なものとなり、間違いなく失敗するでしょう。しかし、現在「西気東輸」を例とすれば、それは決して簡単な開発ではありませんが、実際に東部地区とともにある種の経済循環を形成しています。天然ガスは有価で送られ、タダではありませんが、しかしそれは上海、浙江などと密接な関係にあり、ペイバックされ、回収可能なものとなっています。上海で天然ガスが必要な場合、お金を払わなければなりません。しかし、そこには市場妨害、あるいは独占という問題があります。私は、それこそが問題の所在だと思っています。例えば、新疆の人が私に言うには、天然ガスの開発は終わったが、我々新疆には何も得るところがない、金は中国石化、中国石油といった会社が稼いで持って行ってしまった。本当の意味での地方流動はごくわずかであり、就業機会も多くはないのです。パイプはすべて地中に埋められ、ガスは外部に持っていかれ、ある地方では地方税収もまったく多くなっていません。これは私の憂慮するところです。かつて中国では東部が西部を援助するというのをやりましたが、それはひとつの省単位であり、私はそれでは長続きしないと思います。それらはすべてフリーランチ (free lunch) であり、タダの昼御飯では長続きしないのです。もし上海が本来の市場価格を採用し、資源需要の程度に基

づいて料金を払えば、そうしたお金は本当に新疆に届くでしょう。私は統一された市場を形成すれば経済循環を創出できると考えています。言うまでもなく、西部地区の開発は明確にユーラシア大陸橋と関連しており、より西へ行けば、長期的に見て潜在力のあるものとなります。要するに、問題は金を投入するか否かではなく、市場の障壁を克服するか否かという問題にあると考えています。西部大開発の問題は、投資の計算や投資の回収率を除けば、本当の意味での統一された開放市場を設立し、発展のメカニズムを構築することにあると思います。それによって、かつての長期的な中央政府による資金投入および投資の滞留といった現象を回避することができるでしょう。私達はそれを輸血構造があるのみで、血を造り出す構造はないと言っていますが、西部開発の真の希望とは、そうした血を造り出す構造を創出することであり、そうした構造を創出するために、私はふたつの根本的な基礎、ひとつは人的資源開発、つまり文化、文明、科学、教育などの開発、もうひとつは市場メカニズムの創出があると思います。

●—小島 ものすごく、いくつも質問されて、ちょっと全部は覚えていないのですが。要するに、われわれが現在扱っている経済学の範囲というのは、非常に短期的な範囲でしか考えられなくて、10年とか20年の範囲はなかなか計算できないのです。したがって、そうした経済学を援用して、20年とかあるいは50年ですね、とくに林業経済学などというものは50年の時期に延長して考えなければならないのですけれども、そうした視点が必要ではないかというのが私の考えで、西部大開発において道路建設に何%使うか、鉄道建設に何%使うか、どちらに使ったほうがより経済的か、これは計算可能なのです。これは交通経済学でかなり計算可能なのですが、さきほど南開大学の先生が言われたように、政治的社会的な側面が非常に多く要素に入ります。だから、そういうものを

経済一本で計算するというのはいりえないことなのです。私はその限界を承知した上で、なおかつその投資に対する効率、収益性、減価償却率、これはどうしても各プロジェクトにおいて計算した上でやるかやらないかを決めるということが必要ではないか、ということなのですけれどもね。だから、あなたが言われた、いろいろたくさん、ひとつの工事、プロジェクトの計算、これはたぶん可能だろうと思うんですね。コストがどのくらいで、直接的にどのくらい効果がでるか、これは可能なのです。それでは、4200メートルの天然ガスですね、天然ガスを敷設した場合にこれはどのくらいの収益を生むかということ、これはわれわれが習った経済学ではちょっと計算しにくい。しかしながら、計算の方法は、われわれは開発すべきだ。昔の中国の人は草という字を発明したくらい素晴らしいのですから、いまの人がそのくらい頭を動かしてやってもできるはずなんですよ。そのくらいの科学性というものは経済学に、私はありうるだろうと。そのくらい大きなプロジェクトが西部大開発だと、これしかお答えのしようがないんですね。

●—司会者 どうもありがとうございます。ちょっとまだ時間がありますので、最後の質問お願いします。

●—張琢 小島先生の今回のお話は、私にとって大いに啓発されるものでした。先生のお名前は麗逸ですが、逸には浪漫といった意味があります。私はこの問題はより浪漫があると思います。あなたは私達を2225年以前、つまり秦王朝建設の時代まで連れていってくれました。今年、EUは再び拡大され25の国家となりましたが、現在の25のEU加盟国と、当時秦王朝が中国を統一したときの36郡の面積はちょうど同じくらいです。つまり、現在のヨーロッパは2225年のちに、中国において2225年以前に行われたのと同様の大統一を為したのです。このふたつの歴史の比較は、とても面白いものです。以上のことは、中国とヨー

ロッパで地理的条件が異なるということを反映しています。まず地理的な基礎が違うということです。もうひとつは、現在のことで、アメリカの西部大開発と比較すると、私達はまた浪漫を感じますが、つまりグローバル化という状況下においても、ロッテルダム、西海岸、アメリカやヨーロッパの大西洋岸、すなわちアメリカのロスアンゼルス、カリフォルニア、西海岸などがあるわけです。中国の西部大開発はヨーロッパとアジアを一体とするものなのです。ちょうど100年前、魯迅が日本に留学したとき、彼は「欧亚同慨」、ユーラシア大陸を地球の「同此涼熱」に変えると話しましたが、これと同じ観点です。現在のウルムチは地球上最大の大陸の地理的中心にあり、ウルムチは河を通じて海に到り、四つの大洋に通じ、西にはさきほど話したロッテルダムがあり、上海に到れば東海岸や連雲港があり、南方には以前テロ組織が襲撃した、中国がパキスタンに建設した深水港、つまりバース湾の輸出港があり、インド洋へ出られるのです。そして、北方にはロシアと鉄道で繋がり、マルミンスク、北氷洋へも通じることができます。この広大な計画は、空間面から、そして時間面から論じれば、より拡大することが可能であり、西部開発はその意味でとても有意義なもので、非常に価値あるものだと考えています。先生が提起されたように、10年後に再検討すればよりふさわしいかもしれません。しかし、私が思うに、問題を社会学から考慮する必要もありません。中国における現在の中西部開発、ことに都市開発は10年では収まらず、さらに引き伸ばされます。もしもそのような場合、社会が安定しなければ、すべては水泡に帰します。現在はすでにそ

の時機です。すでに具合が悪いことがいくらかあり、現在はその局面となっています。

●—小島 私には中国という中で主に考えていたわけですね。乾燥地域と半乾燥地域の混乱性、それに対してしっかりと計算をうまくやっていますかということを中心に主張していたわけですね。両方の先生はもう少し、きっと私よりも年齢がお若いんでしょうね、広大なことを考えておられて、ヨーロッパと太平洋・東アジア全体をそういうものの一環として見たほうがいいのだと。これはやはり、私はそれほどそうした見方を持っていなかったもので、両先生から大変教えられたことなんですね。それで、どうでしょうか。私は今年70なんです。それで、あと何年生きるかわかりません。ですから、西部大開発が20年、30年先そうなるかどうか、そこまでちょっと生きていられないのです。お墓はすぐ近くで待っているわけです。これは神様が決めることで、私が決めることではないものですから、私が先に行きますから、先生方はもう少し長生きされて、30年後にですね、愛知大学で議論したこと、要するに中国国内で限定して考えるのではなくて、もう少しグローバルイゼーションで、東、太平洋側とヨーロッパまで含めて中国の西部大開発を考えるべきだと。そちらが合っているかどうかということ、できるだけ早く、お墓へ来て私に報告してください。最初に来られた人に、私は大歓迎会を開きます。これが答えでございます。

●—司会者 どうもありがとうございます。まだまだ質問あるかと思いますが、時間が来ましたので、これで終わらせていただきます。最後に講師の方に盛大な拍手をお願いします。

西部大開発の構想とその成否を判定する視点

小島麗逸

西部大開発は 2000 年から実施に移された。この大プロジェクトを過去の中国内外の歴史的経験に照らして構想の概要と成否の判定を行う視点について報告する。成否の判定は現在時点では早すぎる。30 年後あたりから可能となると考える。高齢社会への突入に伴う社会保障費（2015 年後以降）、労働力不足に伴う賃金の上昇（やはり 2015 年後以降）、膨大な構築物の耐用年限（一般に 40～50 年）の償却費の著増など資金面から支えられなくなる可能性が大きい。

1. 人類史の巨大プロジェクトとの対比

- (1) ローマ帝国 400 年の道路網建設 (No. 1)
- (2) 秦代から後漢に至る 400 年の軍用道路網の建設 (No. 1)
- (3) アメリカの 19 世紀の西部開発
- (4) 帝政ロシアの 19 世紀のシベリア鉄道建設
- (5) 1930 年代から 70 年代に至る旧ソ連のウラル山脈以東の軍事都市建設
- (6) 春秋戦国時代から明代に至る万里の長城建設
- (7) 揚州から北方地方に至る大運河建設

成否は政治的統一、統一市場の形成、文化的統一の 3 方面が実現できない場合十全な成功とはならない。上記の中、最も成功したものは (3)、失敗したのは (5) である。(5) については Fina Hill and Clifford G. Gaddy の ‘The Siberian Curze: How Communist Planners Left Russia Out in the Cold’ がある。失敗要因を寒冷、極寒地に建設した軍事都市は点（飛点）で周辺地域経済との市場的連結性の実限に失敗したことに求める。本報告者はこの要因の上に構築物の維持費をつけ加えて西部開発の成否判定の視点としたい。西部開発の 60% が砂漠ないしは準砂漠地帯である。点のみの成功、面に及ばない可能性が大きい。

2. 1950 年以降の 2 回に亘る漢族の西進

- (1) 1950 年代の建設兵国と国営農場による西部開発の成功と失敗
- (2) 1960 年から 70 年代にかけての ‘三線建設’ の結末

3. 1950 年代以降の政府の建設計画で実現されなかった計画の理由

- (1) 黄河治水大計画（1995 年 7 月公表）
- (2) 全国水運網計画（1959 年、計画化にまで至っていない）
- (3) 時々公表された表土保持計画と植林計画（時々的重要計画中に入った指標、こ

とごとく目標を達していない)

- (4) 第2次5ヵ年計画(1958年～62年、1956年9回、骨子のみ公表)
- (4) を除いて(1)、(2)、(3)が実現できなかった理由

4. 今日の西部大開発の構想と実施状況

- (1) 構想の骨格と条件(1999・10/21-30、朱鎔基総理の発言)

第1. インフラ建設-基礎

第2. 生態環境の回復-根本

第3. 産業構造の調整→鍵

第4. 科学技術と教育の振興→重要条件

実質は東部経済のための資源開発ではないか→(No. 2)

5. 成否判定の基準

- (1) 資金面: 財政資金問題、国債利子、構築物の減価償却費問題
- (2) 労働力問題: ‘孔雀は東へ飛び、雀のみ残る’ ‘ニュージーランド(新西蘭)を嫌う雰囲気’が改められるか(No. 6)
- (3) 都市形成で周辺地域経済との連結性が実現できるか
- (4) 民族問題: とくに少数民族の固有文化を漢族の漢字文化が消滅させないか。

No. 1

〔出所〕 ジョセフ・ニーダム、東畑精一他監修、田中修他訳 『中国の科学と文明』 第一〇巻
 土木工学、思索社、一九七九年、四一五頁間の折込み

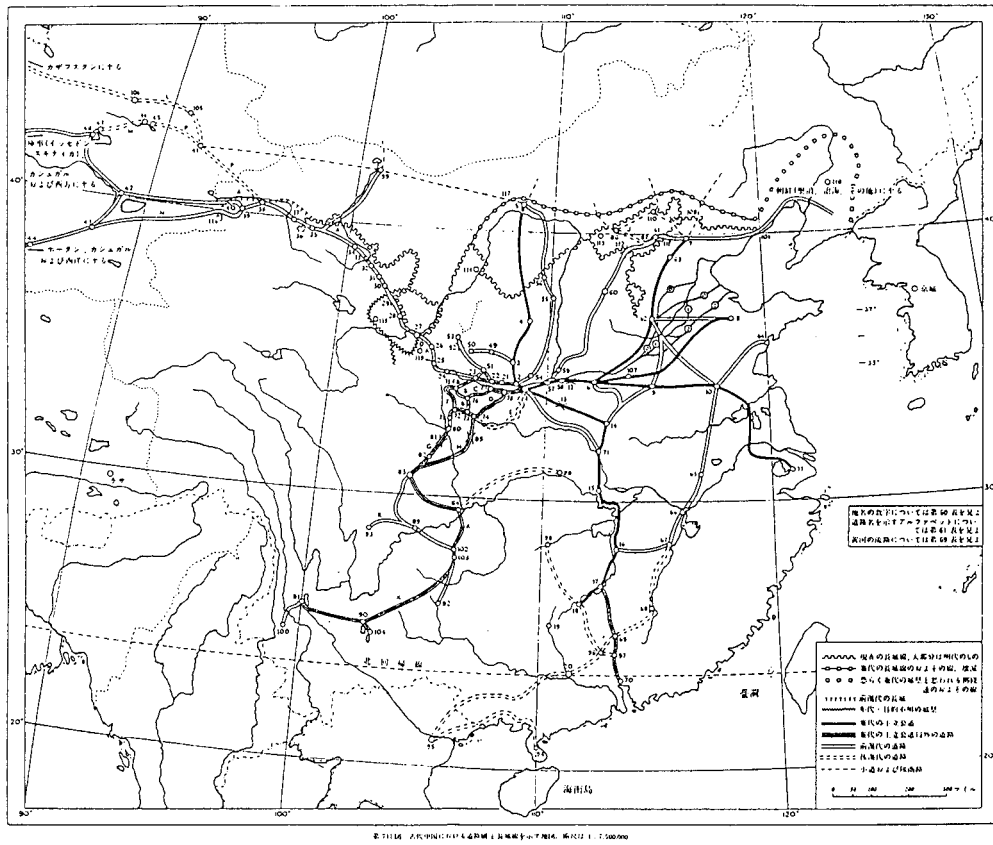
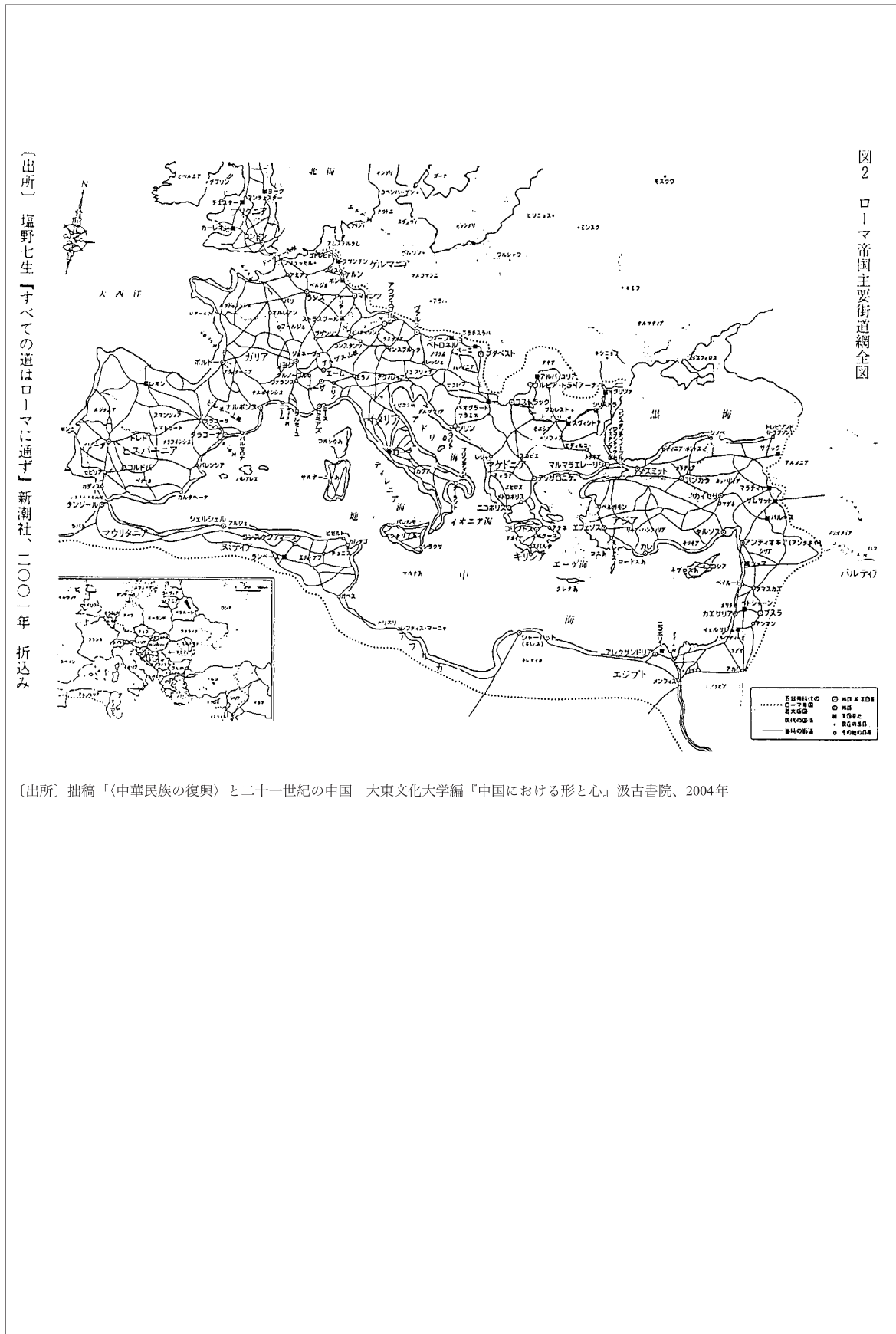


図1 古代中国における道路網と長城線を示す地図



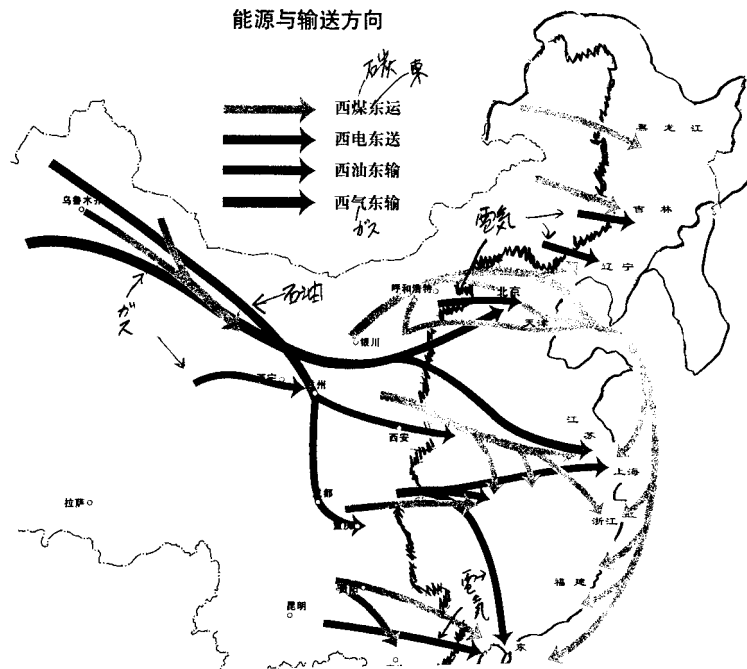
〔出所〕 塩野七生「すべての道はローマに通ず」新潮社、二〇〇一年 折込み

図2 ローマ帝国主要街道網全図

〔出所〕 拙稿「〈中華民族の復興〉と二十一世紀の中国」大東文化大学編『中国における形と心』汲古書院、2004年

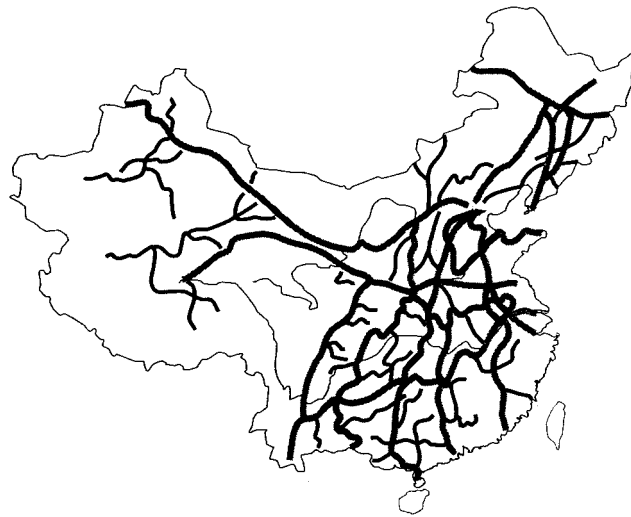
No. 2

①



②

図6 全国陸上石油天然ガスの長距離パイプライン網計画図



〔出所〕『中国石油天然気工業年鑑』1996年版、石油工業出版社、1996年、見開きによる。

③ 表2 長距離光ファイバー敷設距離

	延長距離 (km)	1990=100
1990	0.33	100
91	0.65	197
92	1.44	436
93	3.87	11.73
94	7.33	2,221
1995	10.69	3,239
96	13.02	3,945
97	15.08	4,570
98	19.41	5,882
99	23.97	7,272
2000	28.66	8,685
01	39.9	12,094
02	48.77	14,779

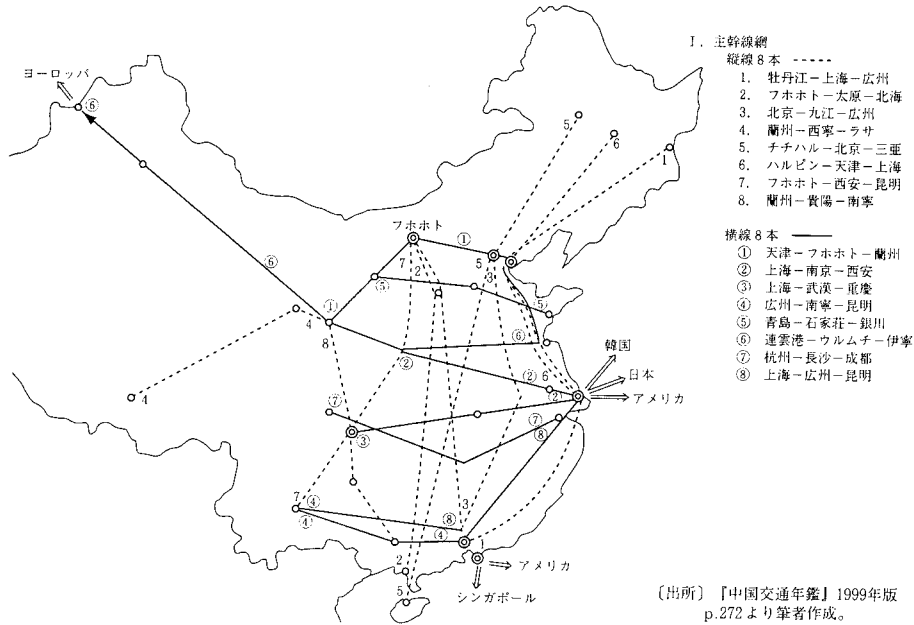
〔出所〕『中国統計年鑑』2003年版 608ページ

④ 表1 高速道路延長距離 (万km)

	高速道路延長距離	総道路延長距離
1989	0.03	101.4
1990	0.05	102.8
91	0.06	104.1
92	0.07	105.7
93	0.11	108.4
94	0.16	111.8
1995	0.21	115.7
96	0.34	118.6
97	0.48	122.6
98	0.87	127.9
99	1.16	135.2
2000	1.63	140.3
01	1.94	169.8
02	2.52	176.5

〔出所〕① 1989～98年：『中国交通年鑑 1986～2000年』中国交通年鑑社 2000年3ページ。
② 1999～01年：『中国統計年鑑』2002年版532ページ。

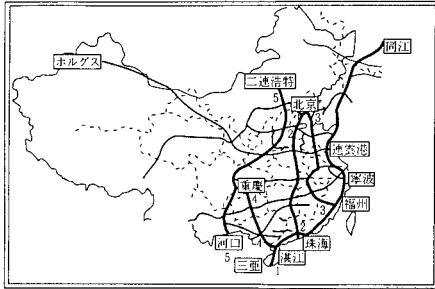
⑤ 図5 全国光ファイバー主幹線 (1991年決定)



⑥

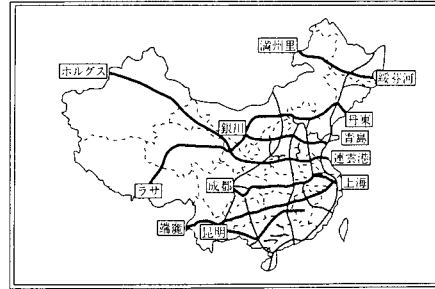
図4 中国高速道路計画

図4-1 主要高速道路5本の南北線計画



- 南北線
1. 同江（黒龍江省）→三亜（海南省）
 2. 北京→珠海（広東省）
 3. 北京→福州
 4. 重慶→湛江（広東省）
 5. 二連浩特（内蒙古）→河口（雲南省）

図4-2 主要高速道路7本の東西線計画

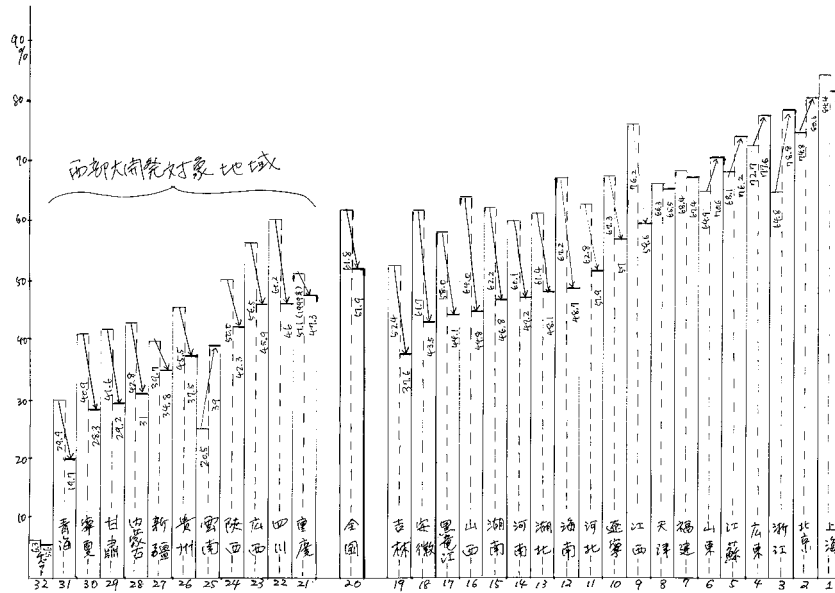


- 東西線
- ① 綏芬河（黒龍江省）→満州里
 - ② 丹東（遼寧省）→ラサ
 - ③ 青島→銀川（寧夏）
 - ④ 連雲港（江蘇省）→ホルグス（新疆）
 - ⑤ 上海→成都（四川省）
 - ⑥ 上海→瑞麗（雲南省）
 - ⑦ 衡陽（湖南省）→昆明（雲南省）

〔出所〕 International Highway Construction Corporation
 (http://www.xes.ne.jp/ihcc/) (03.10/2より)

〔出所〕 ①：金風君他『中国西部社会経済発展圖冊』五洲傳播出版社
 ②～⑥：拙稿『中国における形と心』汲古書院、2004年

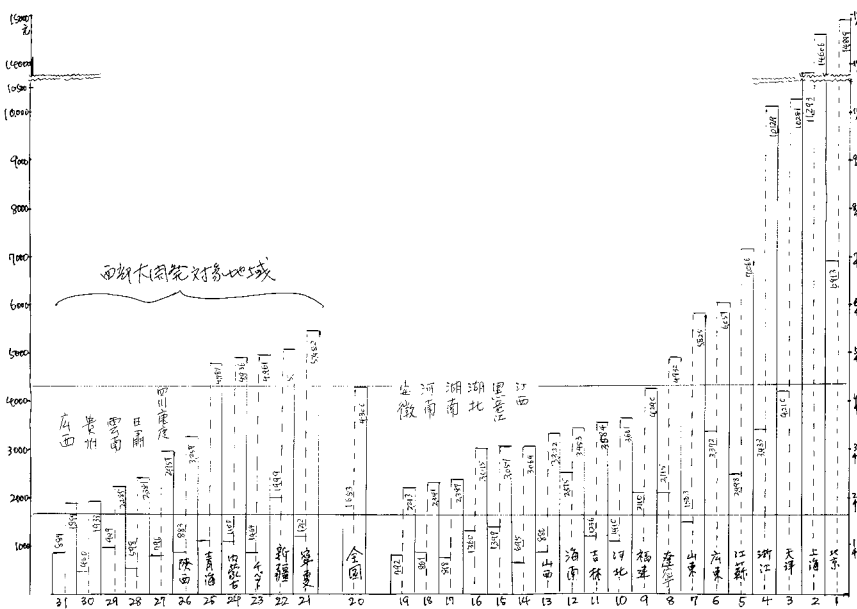
No. 3 図 地方財政の自立度（収入／支出）の1995年（左）と2003年（右）との比較



〔注〕 排列は2003年値の高いものから左へ

〔出所〕 『中国統計年鑑』2004年版 p. 298, 302, 1996年版 p. 237, 239

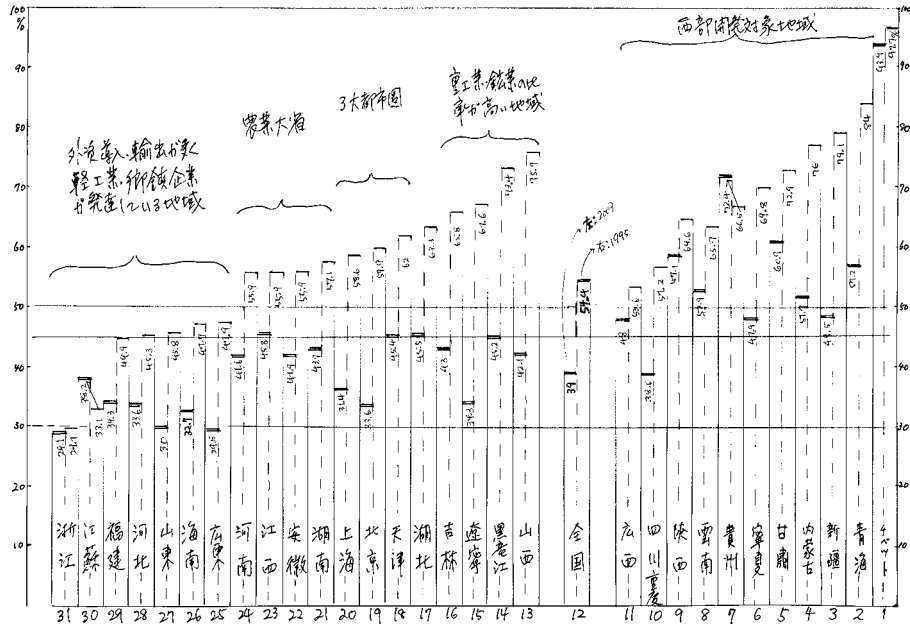
No. 4 図 1995年（左）と2003年（右）の1人当たり固定資本投資額の省・市・自治区比較



〔注〕 四川重慶は合算値。数値単位：元、排列は2003年値の高いものから右から左へ

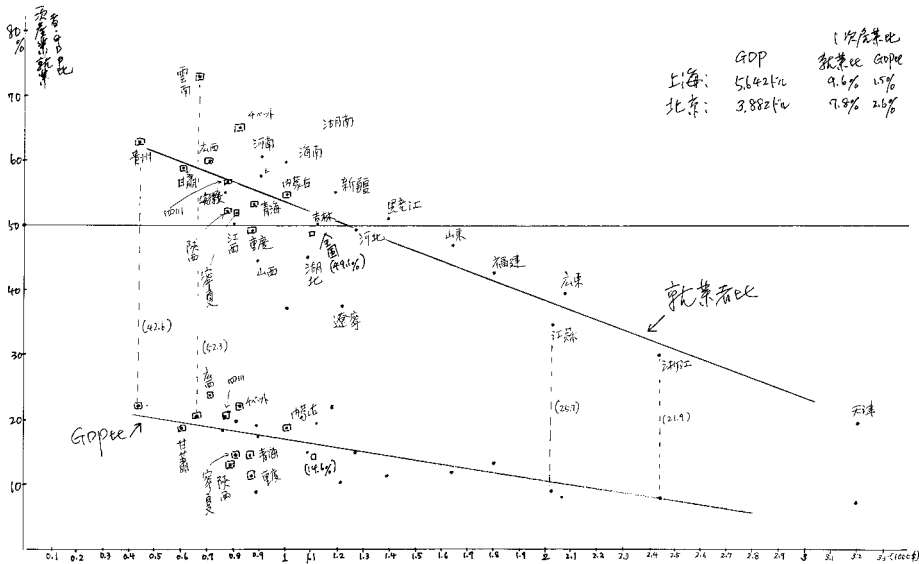
〔出所〕 『中国統計年鑑』1996年版 p. 70, 140, 2004年版 p. 96, 190

No.5 図 全固定資本投資に占める固有部門の1995年(右)と2003年(左)の比率



〔注〕 四川と重慶は一本化、数値は%、右：1995、左：2003 〔出所〕 『中国統計年鑑』1996年版

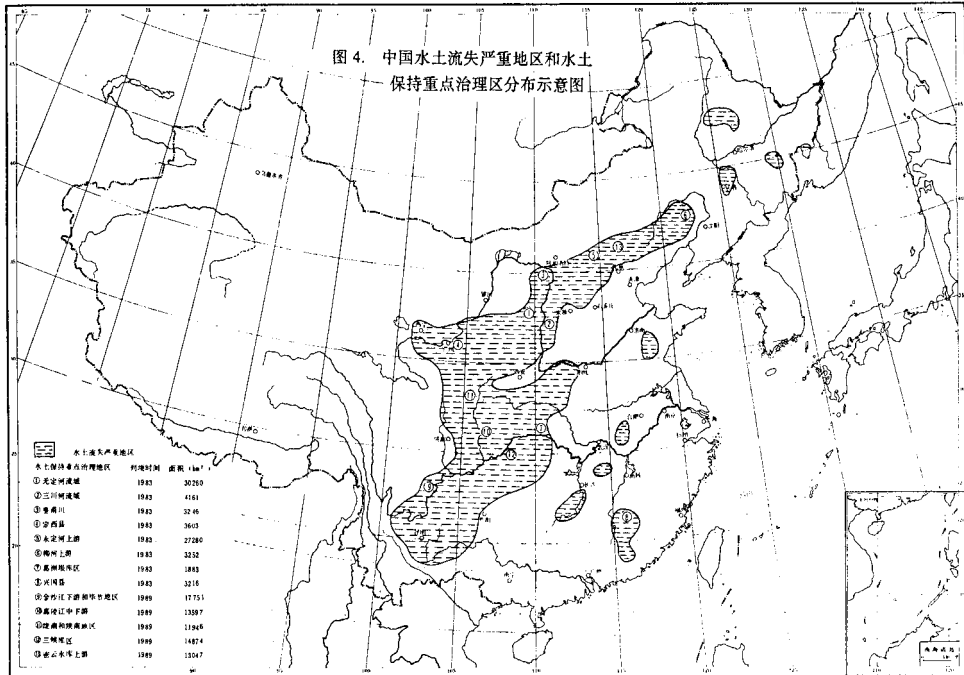
No.6 図 省・市・自治区別1人当たりGDPと第一次産業の就業者比及びGDP比(2003年)



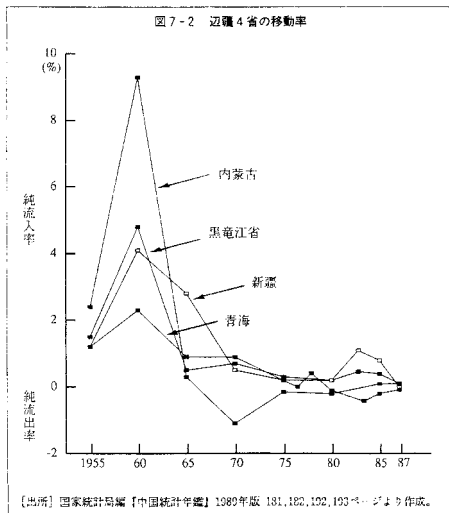
〔注〕 □：西部開発対象地域 □：全国平均 ・：その他一般
 浙江など4省に上下線が引かれている。就業比とGDP比との格差を示す。()内はその数字。
 〔出所〕 『中国統計年鑑』2004年版 p. 63, 126

No. 7

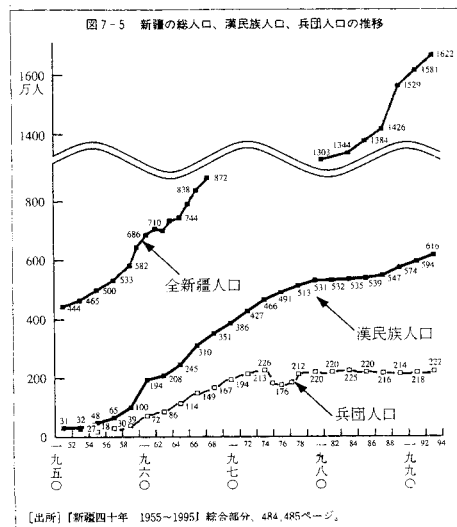
①



②

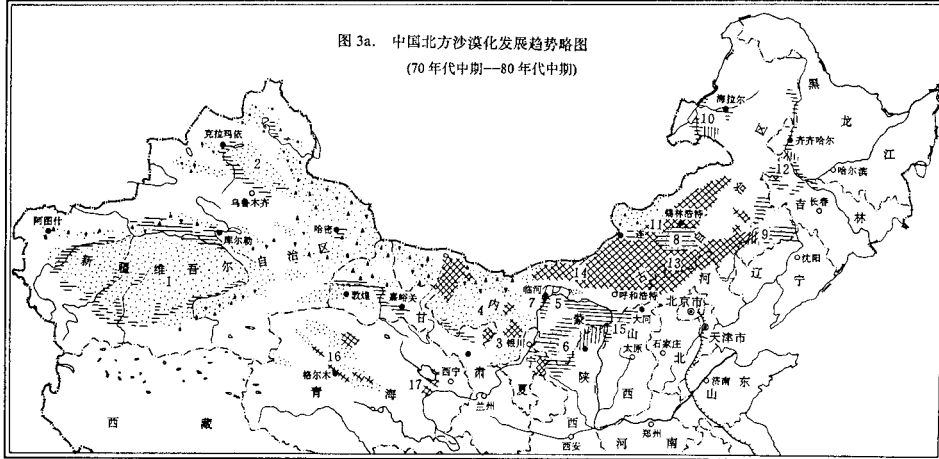


③



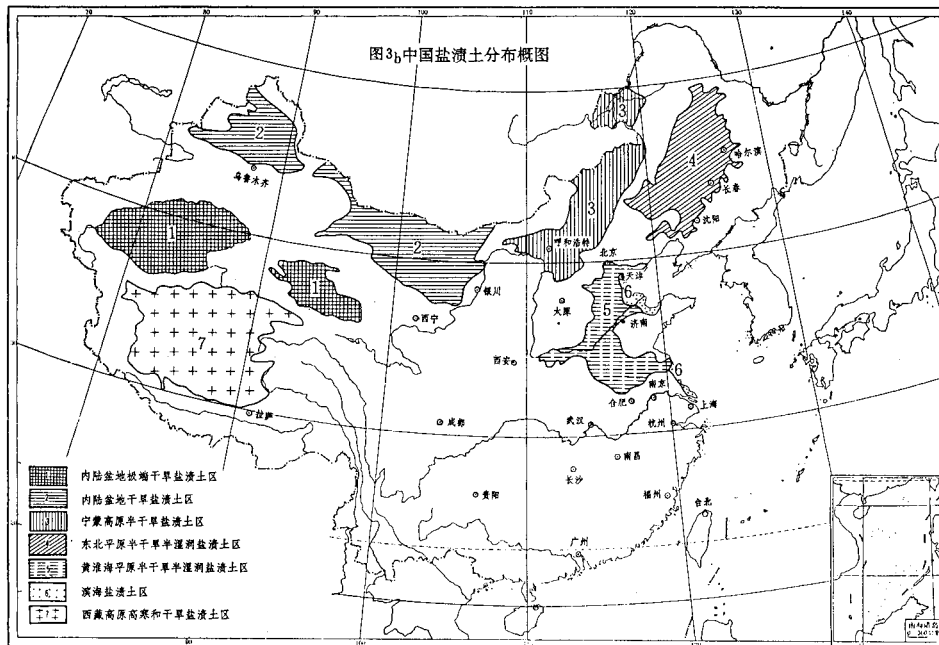
No. 8

①



- | | | | | | | | | | |
|--|----|--|----|--|-------------|--|------------|--|------------|
| | 沙漠 | | 戈壁 | | 正在发展中的沙漠化土地 | | 比较稳定的沙漠化土地 | | 正在逆转的沙漠化土地 |
|--|----|--|----|--|-------------|--|------------|--|------------|
1. 塔克拉玛干沙漠 2. 古尔班通古特沙漠 3. 腾格里沙漠 4. 巴丹吉林沙漠 5. 库布齐沙漠 6. 毛乌素沙漠 7. 乌兰布和沙漠 8. 浑善达克沙地 9. 科尔沁沙地
 10. 呼伦贝尔草原 11. 锡林郭勒草原 12. 松嫩沙地 13. 察哈尔草原 14. 乌兰察布草原 15. 晋西北 16. 柴达木盆地 17. 共和盆地

②



- | | |
|--|-----------------|
| | 内陆盆地极端干旱盐渍土区 |
| | 内陆盆地干旱盐渍土区 |
| | 宁夏高原半干旱盐渍土区 |
| | 东北平原半干旱半湿润盐渍土区 |
| | 黄淮海平原半干旱半湿润盐渍土区 |
| | 滨海盐渍土区 |
| | 西藏高原高寒干旱盐渍土区 |